

—千年の都を育む水・土・緑—

(1) はじめに

平安京遷都の詔に“山川も麗しく”とあるように、千年の都の生命力の源は、「京都三山」（東山、北山、西山）である。これら里山は名水を湧出し、建材や燃料などの資源を供給しながら、自然と共生する文化を育んできた。急峻な山々が連なり、水が豊かで冷涼な北山では、特に山林の資源を収穫する林業を生業とし、発展してきた。

また、用水技術や治水工事の発達により、山の麓を中心に農地が開かれ、良質な水、肥沃な土壌、寒暖差の大きな気候といった恵まれた環境が、京の伝統野菜を育み、水運の発達とともに酒造りが発展してきた。

一方、古来より水に対する信仰心が息づいており、日々の信仰や祭り、維持管理の活動等として表れ、今日においても水を崇め守る人々の活動が続いている。

そして、水は恐れ崇める対象だけではなく、納涼床や川下りなどの水辺を身近に楽しむ活動が京都の夏の風物詩となっている。

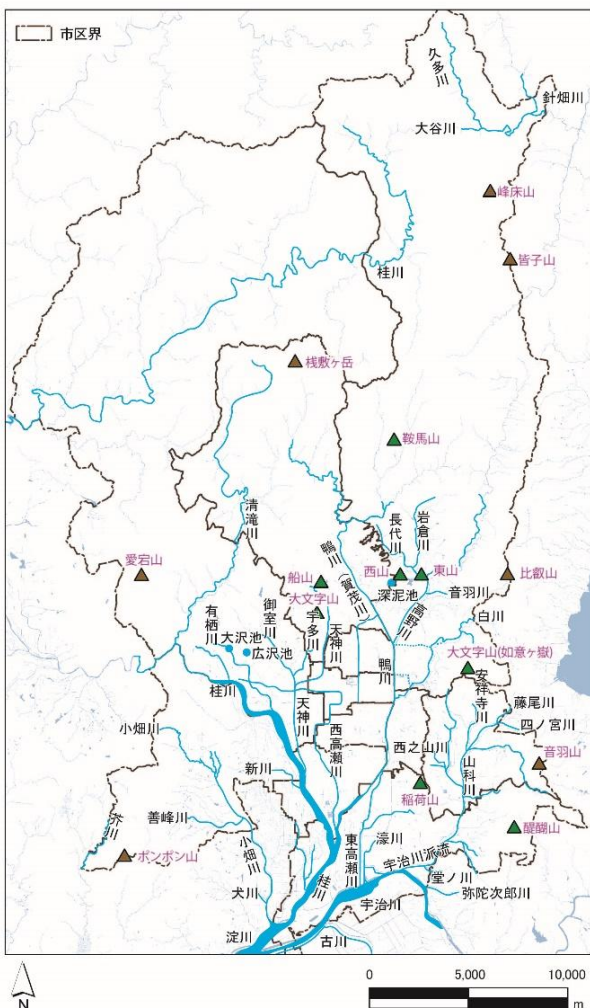


図2-7-1 京都の主な水系

(2) 京の水辺に見る歴史的風致

京都には、河川や疏水、ため池、湧水など豊富な水資源があり、暮らしや生業と水との関わり、様々な恵みをもたらしてきた水に対する信仰活動や維持管理活動、憩いの場としての水辺を楽しむ活動などが息づく。

ここでは、多様な水にまつわる活動によって形成された京都の歴史的風致を示す。

(ア) 京の人々の暮らしを育む河川・水路

a. 水辺の維持管理（保勝会の活動など）

京都では、景勝地や観光地としての魅力向上のために、地域住民によって保勝会が自主的に組織され、水辺の美化などの維持管理活動や地域の個性を活かした催しなどを行なっている。

(a) 建造物

○高瀬川・一之船入<史跡>

京都の中心部と伏見を結ぶ高瀬川は、海外貿易で財をなした豪商、角倉了以・素庵親子により慶長19年（1614）に開削された全長約11kmの人工の運河である。天明7年（1787）に発行された『拾遺都名所図会』には高瀬川と船が描かれる。

高瀬川は、安定した水路の確保を目的として開削され、京と大坂を結ぶことから、物資の運搬においても重要な役割を担った。舟入は、二条～四条間に9箇所作られ、荷物の積み下ろしと船の方向転換の場所であった。二条通南側にある現存する唯一の一之船入（史跡）は、江戸時代の交通運輸の貴重な遺跡である。



写真2-7-1 高瀬川一之船入

(b) 活動及び市街地の環境

平安京へ都が移されて以降、京都では人工的な河川や水路をつくり、運河や生活用水として利用してきた。江戸時代に開削された高瀬川もその一つであり、沿岸住民により維持保全されてきた。

大正8年（1919）に、木屋町通の拡幅により高瀬川を暗渠化する計画が持ち上がったが、沿岸住民が高瀬川保存同盟会を結成し、当該計画に反対した結

果、高瀬川が保存された。昭和5年(1930)には、沿岸住民からなる高瀬川清流会が川底掃除を始め(『日出新聞』昭和5年(1930)),また、昭和8年(1933)には木屋町の旅館や貸席業者たちが鴨樵保勝会をつくり、高瀬川流域の清浄を進めた(『日出新聞』昭和8年(1933))。高瀬川の景観や環境の浄化は、こうした会の清掃活動や沿岸住民の、府や市に対する整備の陳情等により実現してきたのである。

沿岸住民の会はその時々で様々に組織されてきており、現在は、そうした活動を高瀬川保勝会が継承する。同会は、平成26年(2014)に開削400周年を迎えた高瀬川の歴史的・文化的価値を再認識し、美しい景観を保ち、後世に引き継ぐため、舟まつり開催のほか、復元した高瀬舟の維持保存、高瀬川一斉清掃などの取組を展開する。

二条通から七条通までの間の高瀬川及びその沿道から構成されるこの地域は、高瀬川に面して旅館、料亭や伝統的な木造建築物が連担して建ち並び、高瀬川のせせらぎと、桜並木の街路樹が一体となり、賑わいの中に岸辺の風情が混在する独特の町並みを形成する。



写真2-7-2 高瀬川一斉清掃の様子

このように、京都の河川は、都の都市生活を支える重要な基盤となり、この豊かな水辺環境が地域の人々の手により守られ、人々は日常の暮らしのなかで潤いを感じることができる。

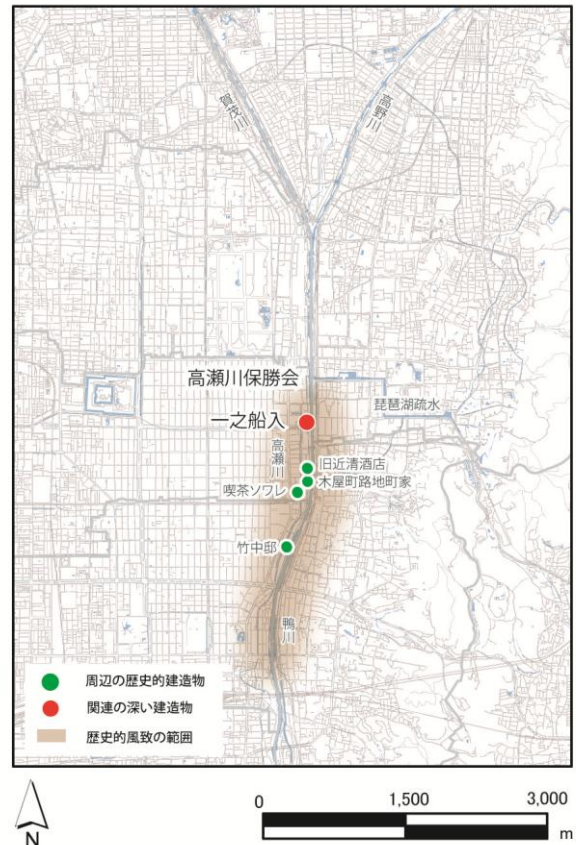


図2-7-2 高瀬川と保勝会の活動

(1) 京の水辺の風物詩

a. 鴨川の納涼床

京都では、毎年5月頃から鴨川、貴船、高雄、鷹峯^{たかがみね}において納涼床が出される。特に鴨川の納涼床はよく知られており、料理店や茶屋は川をよく見える位置に座敷を提供し、人々は川の眺めを楽しみながら京料理を味わう。

(a) 建造物

○三条大橋

鴨川に架かる三条大橋は、室町時代の造営と伝わり、天正18年(1590)に現在の形となった。高欄の擬宝珠には、天正18年(1590)に豊臣秀吉が大改修をした旨の銘文が刻まれている。その後何度も改修が行われ、現在の橋は昭和25年(1950)に改修されたものである。江戸時代後期に発行された『都名所図会』(安永9年(1780))にも現在と同じような外観の三条大橋が描かれる。



写真2-7-3 三条大橋

○鳥彌三主屋<登録有形文化財>

下京区の鳥彌三は、鴨川沿いに建つ鳥料理専門の老舗料亭で、天明の大火(天明8年(1788))直後、当地に店を構えたとされる。主屋は江戸期の建築で、木造瓦葺2階建て、出格子や2階縁の格子組手摺など、多彩な格子が趣ある外観を形成する。時期になると、納涼床が出される。



写真2-7-4 鳥彌三

(b) 活動及び市街地の環境

応仁の乱のあと、三条大橋、五条橋の架け替えなどを経て、鴨川の河原は見世物や物売りで賑わった。それに伴い、富裕な商人が見物席や茶店を設置したことで納涼床が始まった。

当時の床は浅瀬に床机を置いたり、張り出し式や鴨川の砂州に床机を並べたりしたもので、その様子が『都林泉名勝図会』(寛政11年(1799))にも描かれる。

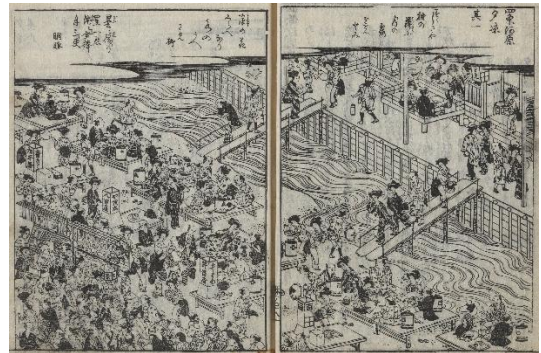


図2-7-3 四条河原夕涼其一 (出典:『都林泉名勝図会』(寛政11年(1799)))

昭和4年(1929)には半永久的な床が禁止になり、昭和27年(1952)に、河川占用に当たっての主に景観上の指針として「納涼床許可基準」が策定され、平成20年(2008)には「鴨川納涼床審査基準」が定められた。京都鴨川納涼床協同組合をはじめ、行政・住民が協同して納涼床の文化風習を未来へと伝えるべく尽力している。

現在、納涼床は5月から9月の期間に出される。鴨川の納涼床は、南は五条通から、北は二条通辺りまで、鳥彌三など鴨川に面する多くの店が出される。鴨川に向かって開放された低層建物が、日本瓦葺きの勾配屋根と軒庇^{のきひさし}を連ねながらまとまり、鴨川の広がりある空間に調和した景観を構成している。三条大橋からは、橋の南北にずらりと並ぶ納涼床を眺めることができ、人々に夏の訪れと風情ある賑わいを感じさせる。

二条通から五条通までの鴨川の西岸に位置するこの地域は、江戸時代の鴨川改修に伴い整備された場所で、鴨川に面して伝統的な木造建築が建ち並び、夏に店々から鴨川に納涼床が設けられる様が、地域独特の情緒と風情を醸す歴史的な町並みを形成する。その中の「先斗町界わい景観整備地区」に指定される先斗町地域は、五花街の一つでもあり、京都においても有数の文化・遊興の中心地として発展し、品格と賑わいを合わせ持つ独特の町並みを形成する。

約 500m 続く先斗町通に接して伝統的建築物が両側に建ち並び、連続する軒下の空間や、町並みに規則的に配される玄関戸、木屋町通と先斗町通に多数存在する路地等とともに、繊細なスケール感を特徴とするとともに、花街文化を継承するお茶屋建築等が歴史的な町並みを形成する。



写真2-7-5 三条大橋からの納涼床の眺め

このように、納涼床は京都を代表する景観の一つであり、伝統文化を継承した地域独特の情緒と風情を感じることができる。



図2-7-4 鴨川の納涼床

b. 嵐山の遊興

嵐山は、京都を代表する景勝地であり、その歴史は桓武天皇（737～806）の行幸のころから始まり、歌枕として多くの和歌に詠まれてきた。13世紀末に、後嵯峨上皇（1220～1272）が離宮（亀山殿）造成に当たって吉野から桜数百株を移植し、桜の名所ともなっている。

春は桜、秋は紅葉と四季折々で現在も訪れる人が絶えず、大堰川（地域により保津川と呼ばれる）は様々な遊興や祭りの場所となってきた。

(a) 建造物

○渡月橋

渡月橋は、嵐山（史跡・名勝）の構成要素で、承和3年（836）の造営が最初といわれる。嵐山中腹にある法輪寺の中興の祖として知られる道昌が、大堰川の堤防改修を手掛けた際に渡した橋が、その始まりとされる。その後の長い歳月の間に、何度も焼亡と流失を繰り返し、現在のものは昭和9年（1934）に完成した。橋脚と橋桁は鉄筋コンクリート製、高欄部分は木造である。

昭和10年（1935）代の写真にも現在と同じ外観の渡月橋が写る。



写真2-7-6 渡月橋

(b) 活動及び市街地の環境

○保津川下り

保津川の水流を利用した京都・大阪への物資の輸送は、長岡京に都があったころから行なわれる。その後、京都嵯峨の天龍寺をはじめ右京区の臨川寺、大坂城築城、伏見城造営にあたり、保津川の水運を利用し、筏により上流の丹波から木材が輸送され、これらを建設するための資材が整えられた。

天明6年（1786）発行の『都名所図会』には、「この流れは常に清らかにして、千代に一度すむ水の黄河には引きかへ、下す筏のかずかず」と記されており、この頃には保津川が水運の役割を担っていたことが分かる。

保津川峡谷の巨岩をはじめ、周囲を囲む山々と、しぶきをあげて落流する水、神秘をたたえた鏡のような渚ふちなど自然美は四季を通じてすばらしく、明治28年(1895)ごろから、遊船として客を乗せた川下りが始まったと伝わる。昭和33年(1958)に保津川下り乗船場兼ホテルである保津川観光ホテルが亀岡に建設されると、誰でも楽しめる観光船として広く親しまれるようになった。昭和30年(1955)の保津川下りの写真が残る。

保津川下りのルートは、亀岡の新保津川大橋辺りから京都の渡月橋辺りまで16kmに及び、川の両岸は険しい山々、その高峰に愛宕山がそびえ、川の流れに沿って見え隠れする。溪谷は、巨岩・奇岩が点在し、岩には船頭のさす竿の跡などが残る。四季様々な自然美と変化に富んだ流れを満喫し、嵐山の自然景観と周辺の寺社等が一体となった町並みを楽しみ、舟は渡月橋付近の船着き場に到着する。

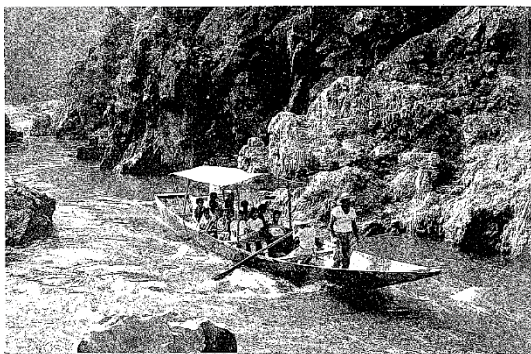


写真2-7-7 保津川下り(昭和30年)

(出典:『昭和の京都 回想 昭和20~40年代』(平成22年光村推古書院) / 撮影:浅野喜市)

〇もみじ祭

嵐山もみじ祭は、嵐山を守護する嵐山蔵王権現に感謝する行事で、昭和22年(1947)嵯峨風土研究会

が中心となって始められて以来、毎年11月第2日曜日に行われる。現在は、昭和9年(1934)に設立された嵐山保勝会により、嵯峨(清瀧、愛宕を含む)や松尾を保勝区域とし、もみじ祭を主催する。

『京の年中行事』(昭和33年発行)に、その由来と当時の祭りの様子が記載される。また、昭和27年(1952)の写真には、船が浮かべられる様子が写される。



写真2-7-8 嵐山もみじ祭(昭和27年)(出典:『京都市今昔写真集』(平成20年樹林舎) P60「嵐山もみじ祭」)

百人一首で知られる小倉山の紅葉の美を讃え、三船祭同様、渡月橋上流において十数隻の社寺船や芸能船が浮かび、龍の頭げきと鶴(想像上の水鳥)の首とを彫刻した船が優雅に詩や舞を艶やかに繰り広げる。



写真2-7-9 嵐山もみじ祭

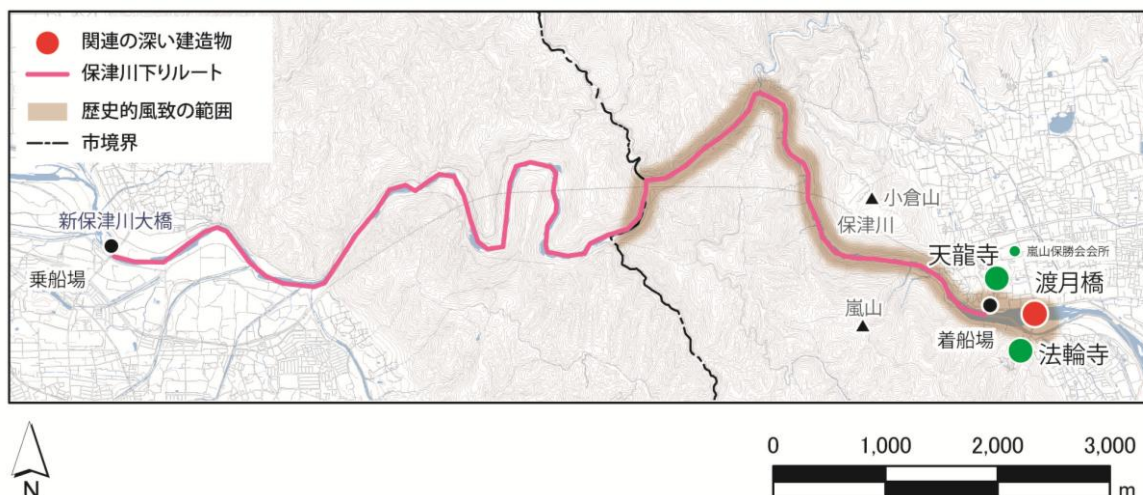


図2-7-5 保津川下り

嵐山地域は、平安時代以来の歴史を有する名所として名高い地であり、嵐山、小倉山、大堰川等の自然景観と、渡月橋、天龍寺、法輪寺等が優れた風景を構成し、全体に豊かな緑の中に和風建築が控え目に見え隠れする、歴史的・自然的な町並みを形成する。渡月橋北西岸部では、沿岸に樹木の緑が続き、木造和風建築物が川岸から後退して樹間におさまり落ち着きのある景観が見られ、中之島では平屋を主とする伝統的な和風の店舗・料亭等が数寄屋の味わいをもつ町並みを形成し、中之島と桂川南岸の間の川には、両側の建物が開放的な座敷等を設け、川辺の風情を演出する。



写真2-7-10 渡月橋北西岸部の町並み



写真2-7-11 中之島

このように、嵐山は京都を代表する自然景観の一つであり、水運文化や伝統文化を継承した地域独特の情緒と風情を感じることができる。

(7) 信仰の対象・祭礼の場としての水辺

a. 松尾祭

松尾祭は、4月に行われる松尾大社の祭礼であり、神輿が地域を練り歩き、桂川で船渡御ふなとぎよが行われる。

(a) 建造物

○松尾大社本殿<重要文化財>

西京区の松尾大社は、渡来人秦氏に一族の氏神として信仰された古い社で、大宝元年(701)に創建された。松尾山の麓に位置し、大山咋神・市杵島姫命おおよまくのひめ いちきしまひめのみことを祀り、境内に霊亀ノ滝、亀ノ井の名水があり、酒造家の信仰が厚い。

本殿(重要文化財)は天文11年(1542)に改修され、一重、両流造檜皮葺である。



写真2-7-12 松尾大社境内

○西寺跡<史跡>

南区の西寺(史跡)は、平安京建都時に羅城門を挟んで東西に建立された二大官寺の一つである。正暦元年(990)の大火など火災が相次ぎ焼滅した。現在は西寺児童公園の中央に講堂跡が土壇として残り、付近に元位置をはずれた礎石が残る。



写真2-7-13 西寺跡

(b) 活動及び市街地の環境

松尾大社の松尾祭・神幸祭しんこうさいは、昔は「松尾の国祭」とも呼ばれていたことから多くの人々が関わる壮大な祭りである。神幸祭の3週間後には、松尾祭・還幸祭かんこうさいが行われる。

神幸祭当日、神輿渡御の先導役を務めるさかきごめん 榊御面さかきごめん (翁おきなと媼おなの面を付けた2本の榊)が出され、松尾大社本社で面合せが行われる。それぞれの榊は二人の稚児が捧げ持つが、翁面の稚児は、氏子域の南方にある吉祥院の石原・嶋地区から、媼面の稚児は、吉祥院の中河原・新田・三ノ宮地区からそれぞれ出される。面合わせの後、松尾七社おおみやしや つきよみしや (大宮社、月読社、櫛谷社、宗像社、三宮社、衣手社、四之社)の神輿おおみやしや (月読社は唐櫃)が、本殿の分霊を受けて、拜殿を3回廻った(拜殿廻し)あと、順次出発する。神輿等は社前の街道を南へ進み、市街地を練り歩いたあと、神輿をのせた船が桂川を渡る船渡御が行われる。船渡御では、神輿を桂離宮近くの桂川西岸から乗せ、東岸で陸あげする。その後神輿は衣手神社、三宮神社、西七条御旅所に分かれて安置され、還幸祭まで日夜賑わう。

『都名所図会』(天明6年(1786))においても、神輿や船渡御の様子が描かれており、当時の神事を受け継いでいると想像される。また、『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)にも神輿が桂川を渡御する様子が記載される。

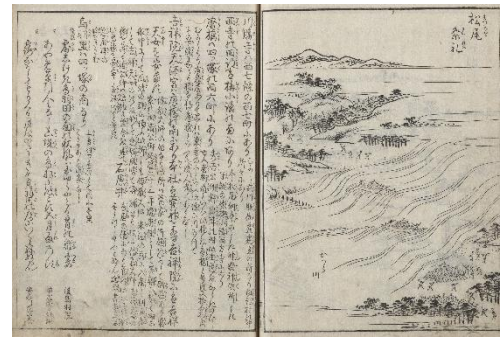


図2-7-6 松尾大社祭礼

(出典：『都名所図会』(安永9年(1780))

還幸祭では、西寺跡の「旭の杜」に集合し、ここで古例による西ノ庄の粽の御供、赤飯座あかいざの特殊神饌しんせんをお供えして祭典をしたあと、列を整えて途中朱雀御旅所に立ち寄り、ここでも祭典を行い、次いで七条通を西に進み、西京極、川勝寺、郡、梅津の旧街道を経て、松尾橋を渡り、本社に帰る。

松尾大社周辺は、豊かな緑が保全されており、山麓の宅地も、後背地の山地と一体的に、緑を主体とする自然景観を保持している。世界遺産の西方寺(苔寺)や松尾大社等の歴史的資産があり、その周辺は山麓の自然景観に調和する良好な町並みを形成している。

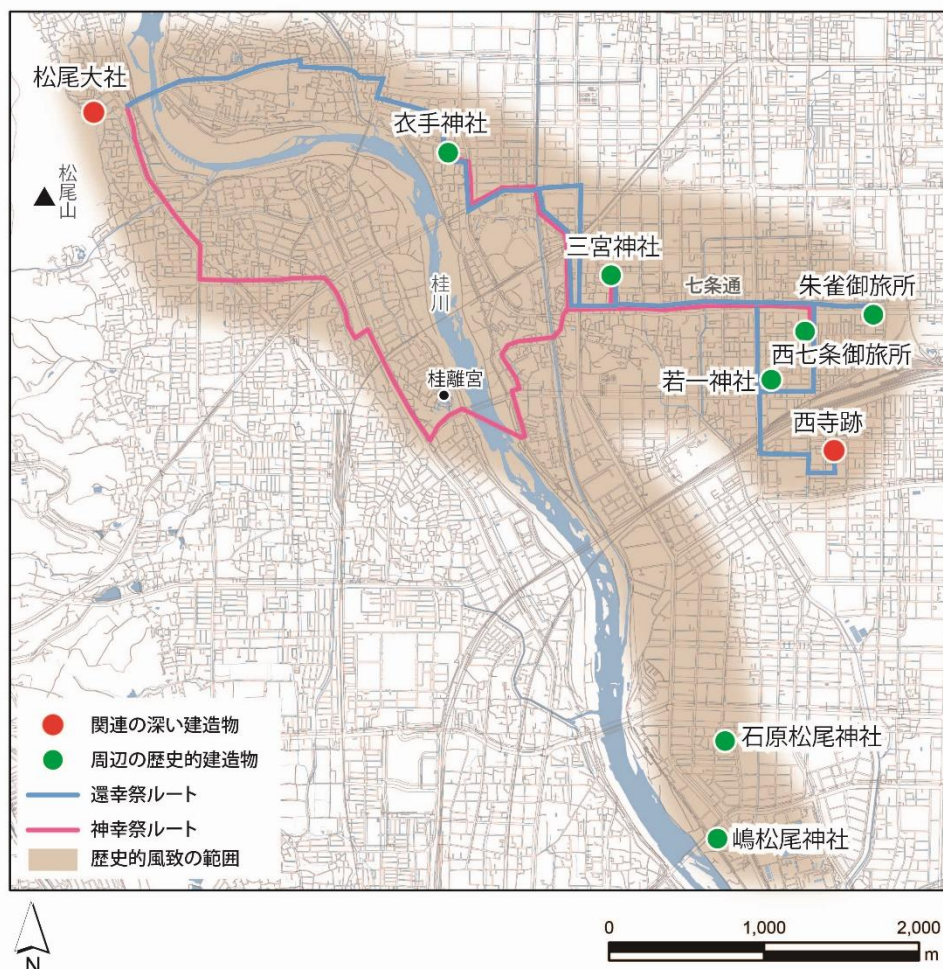


図2-7-7 松尾祭

松尾祭の神輿が巡行する地域は、各所様々な町並みを有する。桂川沿岸では桂川の自然景観と調和した町並みが広がり、桂離宮周辺は、桂離宮の大きな森がこの地域の風景に特徴を与える。桂川から西側の七条通周辺は、古くから工場と住居が共存する地域で、西側は活気溢れる下町の風情を醸し出す。さらに還幸祭が通る梅津地域は、梅宮大社の周辺に伝統的な町家や蔵が残り、歴史的な町並みを形成する。

このように、松尾祭は、松尾山麓の自然景観と調和する市街地での神輿巡行と、桂川での船渡御があり、「松尾の国祭」と呼ばれるように多くの氏子が関わり、人々の活気と水辺との一体感を感じさせる。

b.三船祭

三船祭は、5月に行われる車折神社の祭礼であり、大堰川で平安時代の船遊びが再現される。

(a) 建造物

○車折神社

右京区車折神社の祭神は清原頼業である。頼業公は平安時代後期の儒学者であり、平安時代末期の文治5年(1189)に逝去し、清原家の領地であった現在の社地に葬られ、廟が設けられた。

嵯峨天皇が嵐山の大堰川に遊幸のとき、この社前において牛車の轅(車体から前に伸びた2本の棒)が折れたので、「車折大明神」の神号を送った。これ以後、「車折神社」と称することになった。



写真2-7-14 車折神社 拝殿

本殿は、棟札によると宝暦2年(1752)に建築された入母屋造、銅板葺絵造の建物である。

(b) 活動及び市街地の環境

三船祭は、車折神社の神事として、昭和3年(1928)に天皇の即位の儀式である御大典を記念して始められた祭礼である。現在では神社と地元住民が協力して執り行い、祭礼の準備や衣装合わせなどを車折神社で行う。毎年5月の第3日曜日に、大堰川において、祭神である清原頼業公が活躍した平安時代の船遊びを再現するもので、御座船・龍頭船・鷓首船を

始めとし、船の上で様々な伝統芸能が披露される。

『京の年中行事』(昭和33年(1958)発行)に、当時の祭りの様子が記載される。

祭礼当日は、中之島公園から行列を行い、平安時代の装束をまとった人々がゆっくと歩く。



写真2-7-15 行列の様子 (提供: 車折神社)

そして、渡月橋上流から、御座船を先頭に、龍頭船、鷓首船、御伴船が出発し、順次奉納を行う。御座船では、清少納言に扮した女性による扇流しの奉納が行われ、龍頭船では、雅楽・舞楽の奉納、鷓首船では歌の奉納が行われる。御伴船は、御座船の随侍船であり、複数船が出される。これら多数の船が奉納を行い、嵐山を背景として王朝時代さながらに優雅な様を見せる。

三船祭の行列や舟遊びが行われる渡月橋周辺は、沿岸に樹木の緑が続き、木造和風建築物が川岸から後退して樹間におさまり落ち着きのある景観が見られる。また、車折神社周辺は、嵐山や小倉山、桂川等の自然に恵まれ、和風の住宅が並ぶ落ち着いた町並みを形成する。



写真2-7-16 船遊び (提供: 車折神社)

このように、車折神社の歴史的な建造物と、新緑の嵐山が映える豊かな水辺空間、平安王朝の雅で華やかな装束や船遊びが一体となり、人々に悠久の平安文化を感じさせる。

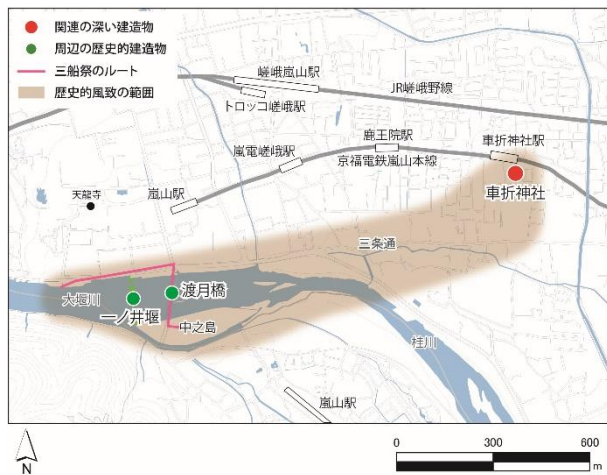


図2-7-8 三船祭

(I) 水運のまち伏見・淀

伏見・淀は京都・大坂・奈良・近江の中継地にあたり、木津川・宇治川・桂川・鴨川の流れ込む、水路、陸路ともに交通の要衝でもあった。そのため、文禄3年(1594)から始まる秀吉による伏見城城下町の建設に際して、まず、建築資材を運ぶため伏見港を開き、巨椋池と宇治川を分離させるための大規模な工事を行った。そして、^{たいこうづつみ}太閤堤、^{まきしまつみ}槇島堤と呼ばれる堤防を築き、宇治や奈良などを結ぶ街道とした。



図2-7-9 明治22年仮製地図

(出典：伏見城跡埋蔵文化財調査資料より)

この伏見城は元和9年(1623)に廃城になったが、慶長16年(1611)に高瀬川が開削されると、舟運が栄え、伏見は港湾都市として発展していった。

伏見城にかわって徳川幕府により元和9年(1623)新たに淀城が築城され、淀藩が置かれると、淀の城下は京の街道の宿駅として栄えた。しかし、淀城は、慶応4年(1868)の鳥羽・伏見の戦の際に炎上し、現在は天守台と本丸の西・南側の石垣、内堀の一部等が残るのみである。

伏見・淀は、このように交通の要衝であるがゆえに栄えた町であり、この地では現在も、水運や名水を活かした酒造や祭礼等の伝統的な人々の活動が受け継がれる。

a. 伏見のまちと酒どころ

江戸時代に入ると、京都の豪商・角倉了以すみのくらりょういが、慶長19年(1614)に高瀬川を開削した。これより高瀬川を通じて伏見から京都の中心部へも舟で輸送できるようになり、舟運による物流の拠点機能が高まり、港町として、そして水陸の交通の要衝にある宿場町としてさらに繁栄することとなった。この当時、淀川を伏見から大阪まで往来していたのが十石船や三十石船で、それらが舟運の中心的役割を果たしていた。

かつて伏見は「伏水」と表され、良質な地下水が豊富などころとして知られていた。

伏見では、この良質で豊富な地下水、そして舟運などの物流機能、伏見城が建設されたことにより、城下町・宿場町としての発展による酒の需要の高まりなどを背景に、酒造が盛んになり、江戸初期から本格化した。天保12年(1841)に刊行された『泰平たいへい伏見御役鑑』ふし み おやくがみには、明暦3年(1657)における酒造屋株の存在が記されている。

(a) 建造物

○黄桜酒造

伏見区の黄桜酒造は、創業者松本治六郎が大正初期に実家の清酒製造業より独立し、中京区木屋町通三条下る材木町で酒販業を営み、大正14年(1925)から、伏見区新町において酒造業を始める。昭和8年(1933)には伏見区塩屋町にあった既存の酒蔵(建築年代不詳、登記簿等により昭和8年以前に建築されたことを確認)に移転する。南浜通に面して仕込蔵、北側笹屋町通に面して貯蔵庫や作業室が並ぶ。貯蔵庫は、土蔵造2階建て、切妻造平入棧瓦葺である。



写真2-7-17 黄桜酒造

○月桂冠大倉記念館

伏見区の月桂冠の創業は寛永14年(1637)であり、古くより伏見の酒造りを担ってきた。

月桂冠大倉記念館は、明治42年(1909)に建築さ

れた木造平屋建の建物で(『京都市近代化遺産(建造物等)調査報告書(産業遺産編)』(平成18年(2006)), 月桂冠創業の地の一角にある。同記念館の中庭を挟んで建つ内蔵酒造場では現在も杜氏が昔ながらの手法で酒を醸す。濠川沿いから眺める蔵の建ち並びは、酒どころ伏見を象徴する酒蔵風景として親しまれる。同記念館には、昭和30年代後半からの機械化の流れの中で姿を消した酒造用具等の伏見の酒造用具(市指定有形民俗文化財)が展示され、酒造りの特色と変遷を伝える。



写真2-7-18 月桂冠大倉記念館



写真2-7-19 伏見の酒造用具(月桂冠所蔵)

○伏見城石垣<市登録史跡>

豊臣秀吉がその晩年に築城したのが伏見城である。文禄3年(1594)に指月の丘に城郭をつくったが、大地震により倒壊し、慶長2年(1597)に木幡山に伏見城の築城をはじめた。秀吉の死後、「関ヶ原の戦い」の前哨戦で落城し、家康により再建されたが、元和9年(1623)に廃城となった。石垣は、この廃城時における解体を免れたものだとみられる。



写真2-7-20 伏見城石垣

○御香宮神社本殿<重要文化財>

伏見区の御香宮神社は、伏見の産土神とされ、貞観4年(862)に境内から香水こうずいが湧き出たことから、御香宮と称したとされる。

文禄年間(1592~1596)に豊臣秀吉が、伏見城の鬼門の守護として大亀谷おおかめだにに遷座したが、徳川家康が慶長10年(1605)にもとの場所に戻した。

本殿(重要文化財)は、慶長10年に建築されたもので、五間社流造で、正面に三間の向拝が付く規模の大きな社殿である。墓股や木鼻などに彫刻を施し、極彩色で飾る。



写真2-7-21 御香宮神社

(b) 活動及び市街地の環境

○伏見の酒造り

伏見の酒が飛躍的な大発展を遂げたのは、明治以降である。酒の腐敗防止のため、当時はまだ珍しかったビン詰めの商品に力を入れたり、自動車を利用して東京への売り込みに努めたりするなど、数々のアイデアと努力が実を結び、全国に流通するきっかけをつくった。

伏見では今も京都を代表する銘酒を数多く造り続ける。伏見区内の南浜、板橋、住吉を中心とする区域に多くの酒造会社が点在しており、黄桜酒造や月桂冠大倉記念館、松本酒造や東山酒造などの歴史的建造物では、現在もなお酒造りの工房や記念館として営みを受け継ぐ。冬季に伏見のまちなかを歩いて

いとどこからともなく新酒の香りが漂う。

伏見の酒は、きめの細かい穏やかでソフトな風味を特徴とする。これは主として低温長期のもろみ発酵と、発酵末期に四段仕込みを活用することによって生まれ、洗練された京料理とともに発展してきた。

素材の風味を生かしながら、しっかりと味付けされた京料理に合う酒として、コクがあり、きめの細かいソフトな風味が育まれた。

伏見の蔵元の杜氏たちは、かつて越前・丹波・但馬・南部・広島等様々な地域からやって来ていた。こうした多流派による技の競争が今日の伏見の酒質を作り上げてきたともいえる。



写真2-7-22 酒造の様子(協力:黄桜酒造・東山酒造)

この酒造が行われている伏見のまちは、秀吉の城下町の都市構造と伏見城石垣、かつて水運を担っていた高瀬川や濠川などの水路網が骨格となっている。現在、かつての水運の賑わいを復元しようと、期間限定で十石船と三十石船が宇治川派流を運航しており、水路から酒蔵や歴史を感じさせる風情を楽しむことができる。

また、町家と酒どころ伏見のシンボルでもある大規模な酒蔵が好対照を見せて建ち並ぶ佇まいが特徴的な町並みを形成する。

特に酒蔵は、大規模な建造物でありながら、妻面が見せる深みのある陰影、漆喰壁、焼板壁及び瓦屋根などが独自の風情を醸し出し、酒どころとして近代から今日まで生き続けている伏見の人々の気概をうかがわせている。これらの酒蔵は、鳥羽伏見の戦いで酒蔵のほとんどが被災したため、明治以降、地下水をより有効に活用するため最良の地下水が湧き出る現在の地に構えられたものである。



写真2-7-23 酒蔵の続く町並み

○御香宮の祭り

御香宮神社は、水の豊かなこの地において、香水が湧き出た場所として称された神社であり、今もこの水を汲みに訪れる人々が絶えない。この名水を守ろうと保存会も存在し、清掃活動が行われている。



写真2-7-24 御香宮の御神水

御香宮神社では、10月上旬に9日間にわたり神幸祭が行われる。明治時代以前は旧暦9月9日に行われていたもので、伏見九郷（石井、森、船津、即成就院、山、北尾、北内、久米、法安寺の各村）の総鎮守の祭りであった。『日本歳事史（京都の部）』（大正11年（1922）発行）には、神輿の巡行路が詳しく記載される。

神幸祭の特徴は、各町内より多くの「花傘」が神社に参拝することである。花傘は室町時代の風流傘の伝統を今に伝えるもので、現在、600年にわたる伝統の上に、花傘が年々町内の人々の趣向を凝らした姿で祭りに参加する。最終日には神輿渡御が行われ、氏子域を練り歩く。

なかでも、御香宮祭礼獅々（市登録無形民俗文化財）は、神輿の先払いのための行道獅々の系譜をひくもので、威勢のよい掛け声とともに、120名程の若者が旧伏見城下を疾走する勇壮な練り物である。特に芸を演じるというわけではなく、要所要所において、口をぱくぱくさせる邪気払いの所作が基本であり、現在では、重厚な獅々頭を担いで疾走する勇

壮さが見物となっている。



写真2-7-25 御香宮祭礼獅々

この祭りの9日間、境内には百数十軒の露店が並び、昼夜を問わず参拝者の絶える間がなく、特に8、9日目には多くの人々が参拝する。

伏見の旧市街地は、歴史の中で形成された都市基盤である道路網においては、「四辻の四つ当たり」と呼ばれている、中心線が偏心した、東西南北どの道から来ても突き当たるように作られた交差点などが中世の城下町の面影を伝える。また、水路網においては、伏見城の外堀として開削され後に高瀬川とともに交通の動脈となった濠川^{ほりかわ}などと、運河に面して設けられた船着場などが、近世の水運業の都市としての隆盛を示す。



写真2-7-26 運河沿いの酒蔵群

さらに、この都市基盤上に、洗練された意匠を持つ小規模な町家と、酒造業の振興によって生まれ、材質及び意匠ともに優れた大規模な酒蔵や両替商を営んできた津田家の大規模町家等の歴史的建造物が好対照を見せて建ち並び、近世から近代にかけて活況を呈した商都のたたずまいを今に伝える。

b. 淀のまちと祭り

淀は平安時代から水陸交通の要衝で、物流における海路終点の地と『延喜式』に記されるなど、京の外港として賑わっていた。江戸時代に京都防衛のために淀藩が設けられると、諸大名や外国の使節団は淀川を船で上って淀に宿泊するようになり、淀周辺は宿駅として栄えた。

(a) 建造物

○与杼（與杼）神社拝殿<重要文化財>

伏見区の與杼神社は、淀・納所・水垂・大下津の産土神として鎮座する。諸説があるが、応和年間(961～963)に創建されたと伝わる。慶長12年(1607)に豊臣秀頼の再建した社殿で、明治33年(1900)に旧淀城内の現在地に移築された。

再建時から残る拝殿（重要文化財）は、一重入母屋造、こけら葺で、本殿とともに、桃山時代の特徴をよく示し、近世社殿形式の一典型である。



写真2-7-27 与杼（與杼）神社 拝殿

(b) 活動及び市街地の環境

與杼神社において毎年秋に行われる淀祭は、旧神社跡に向けて3基の神輿が担がれたのが始まりとされる神輿渡御が行われる。当初は船に乗せられて桂川を渡っていた。

この「船渡し」の形態と御旅所（水垂の旧神社跡）への往きと戻りが、神輿のすれ違いができないために順序が逆になることとともに珍しく、「あとが先になる淀祭」という諺にもなったという。『日本歳事史（京都の部）』（大正11年（1922）発行）には、淀祭の由来が記載される。

その後幾度かの休止と再開を経て、平成14年（2002）から45年ぶりに再開し、3基の神輿が淀のまちを巡行し、納所の6辻交差点で担ぎ合いを行う。



写真2-7-28 淀祭（提供：與杼神社）

淀周辺は、桂川左岸に位置し、淀城跡の石垣や與杼神社等の歴史的建造物が残る。周辺は水運と陸運の要所であった面影が街道沿いに残る。

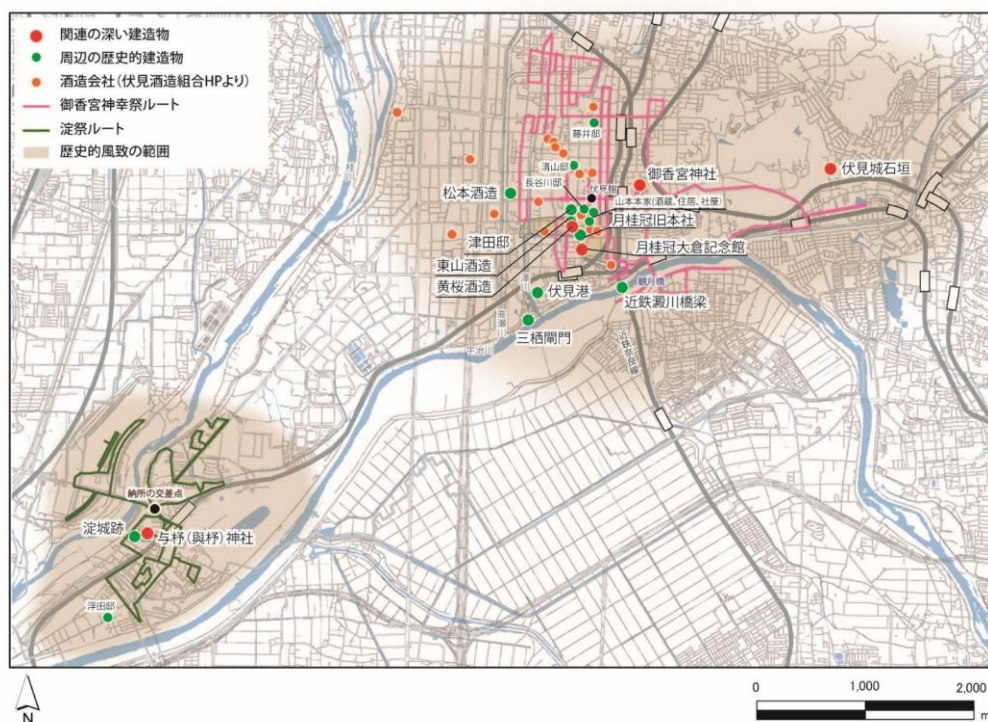


図2-7-10 伏見・淀の水運都市

このように、伏見や淀においては、城下町の都市構造を骨格として、川という京都の自然を生かした水運、名水を活かした酒造や祭りなどの伝統的な人々の活動が現在もお受け継がれている。名水に由来する神社や、酒蔵など歴史的な建造物が建ち並び変化に富んだ町並みにより今もまちに伝統が息づいていることを感じさせる。

(イ) 京の農業を支える水辺

京都には、平安期以前にルーツをもつ農業用水や、琵琶湖疏水から取水する灌漑用水があり、今も農地を潤す。

用水の周辺では、土地改良区が結成され、水の恵みを受ける人々が水辺の維持管理を行い、近隣の寺社では、御田祭など農業と結びつく祭りが行われる。

表 2-7-1 京都市の土地改良区（結成 50 年以上）一覧

名称	結成年
京都市洛北土地改良区	昭和27年（1952）
京都市東山土地改良区	昭和28年（1953）
京都市洛東土地改良区	昭和27年（1952）
京都市越畑土地改良区	昭和31年（1956）
洛西土地改良区	昭和26年（1951）
京都市洛南土地改良区	昭和27年（1952）
美豆土地改良区	昭和27年（1952）
巨椋池土地改良区	昭和27年（1952）

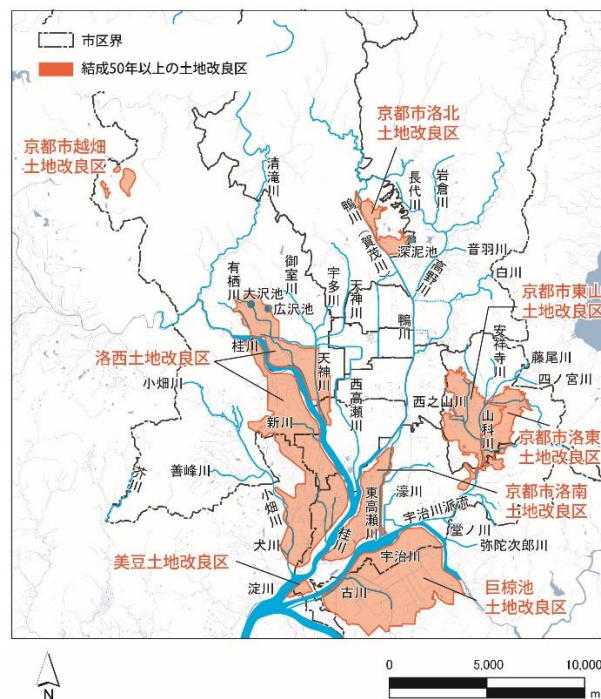


図2-7-11 土地改良区の分布（結成50年以上）

a. 洛西の水の恵み

洛西地域は、5世紀後半、豪族・秦氏によって農業がはじまったと伝わる。嵐山の渡月橋上流から取水する「洛西用水」は、土地改良区によって維持管理され、現在も市域西側の広域の田畑を潤す。また、流域の松尾大社では、お田植祭である御田祭おんださいが受け継がれる。

(a) 建造物

○一ノ井堰（洛西用水）

嵐山の渡月橋上流から取水し、農業水路や雨水の排水路に活用される洛西用水は、5世紀後半、豪

族・秦氏が設置した灌漑用水が起源と伝わる。『都名所図会』(安永9年(1780))にも、洛西用水に関する記載がある。その取水のための堰が一ノ井堰である。江戸時代初期には角倉了以が保津川の開削と同時に一ノ井堰の整備を行ったとされている。現在の一ノ井堰は昭和26年(1951)に京都府により10箇所余りの井堰を統合し、築造されたものである。



写真2-7-29 一ノ井堰(洛西用水)

ひろさわのいけ
○広沢池

右京区の広沢池は、灌漑用のため池として、秦氏が8世紀ごろ農業用水とするためその原型を造ったと伝わる。『都名所図会』(安永9年(1780))にも広沢池が描かれる。

毎年12月初旬に行われる「鯉揚げ」は、冬の風物詩にもなっており、池の水を抜くことで池底の泥を洗い流して池底の微生物を活性化させる。



写真2-7-30 広沢池

おおさわのいけ
○大沢池(旧嵯峨御所大本山大覚寺) <名勝>

右京区の大沢池は、嵯峨天皇(786~842)が弘仁元年(810)に離宮嵯峨院を建築する際に築造した、現存する日本最古の林泉で、大正11年(1922)に国の名勝に指定された。

観月の名所として名高い一方、周辺の水田の灌漑用水源として重要な役割を果たしている。



写真2-7-31 大沢池(提供:旧嵯峨御所大本山大覚寺)

○松尾大社本殿<重要文化財>(再掲:P2-144 松尾祭)

(b) 活動及び市街地の環境

洛西用水や大沢池は、古くから農業用水として利用され続ける。昭和22年(1947)にはこれらの用水の受益者による洛西普通水利組合が結成され、昭和26年(1951)洛西土地改良区に組織変更された。土地改良区の役割は、農業用排水施設、農業用道路その他農用地の保全又は利用上必要な施設の新設、管理等を行うことである。洛西土地改良区の受益地の範囲は広く、右京区西京区の桂川沿岸に加え、さらに南にある久我堰から取水される用水の受益地である伏見区久我地区、羽束師地区も含まれる。

洛西土地改良区では、毎年田植え前の5月に、各地区総出で一斉に用水路の掃除を行う。また、ゴミや生活雑排水の問題に加え洪水時の浸水問題などを抱えていることから、施設の役割や歴史などを小学生の総合教育の教材として提供するなどの地道な取組も行われている。

洛西用水や広沢池等の受益地周辺では、京の伝統野菜をはじめ、多品目の野菜が栽培される。

洛西用水流域に位置する松尾大社では、お田植祭りである御田祭(市登録無形民俗文化財)が行われる。行事の主役は、現西京区下津林、松尾、嵐山の3地区から1人ずつ選ばれる10歳前後の植女である。御田祭は、^{そうふ}壮夫に支えられた植女が早苗を持ち、腕を水平に伸ばし、行列を組んで拜殿を3周するというものであり、すでに鎌倉初期以降の記録類に散見され、なかでも『御田代神事図』(万治2年(1659))には、両手に早苗を持ち、笠をかぶった植女の姿などが描かれており、植女を中心とする御田祭の形態が知れる。『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)にも御田祭についての記載がある。



写真2-7-32 松尾大社御田祭

洛西用水の流域の桂川沿岸では、桂川の自然景観と調和した町並みが広がり、西山の山麓は、世界遺産の西芳寺(苔寺)や松尾大社等の歴史資産があり、その周辺は山麓の自然景観に調和する良好な町並みを形成する。また、山々の内縁部には戸建て住宅を中心とした良好な住宅地が広がる。

松尾上ノ山町の上ノ山古墳は、5世紀後半～末頃に築かれた前方後円墳の「穀塚古墳」の北側に隣接し、公家の葉室家の墓地とも接する。上ノ山古墳や穀塚古墳は断層崖の直上で、桂川西岸の耕作地帯を見下ろす位置にあり、古来よりこの地域の耕作と密接に関わってきた。穀塚古墳は、舶載品(海外からの輸入品)が出土しており、洛西用水を築造した秦氏一族の墓である可能性も考えられている。

葉室家は平安時代の藤原北家を起源とする公家で、平安時代からこの地域で荘園を営んでいた。近隣には葉室御霊神社や葉室家により再興された黄檗宗の浄住寺、代々葉室家に仕えた山口家の住宅(登録有形文化財)などが残り、弥生時代から残る古墳とともに、洛西用水の背景に歴史的な町並みを形成する。



写真2-7-56 上ノ山古墳周辺の町並み

大沢池・広沢池周辺の北嵯峨及び嵯峨野地域は、背景をなす遍照寺山のなだらかな山景と池が一体化し、その周辺に平坦に広がる農地をも合わせ、京の雅^{みや}びを代表する風景を今に伝える。この北嵯峨から嵯峨の風景が続く山麓部一帯は、古くから隠棲の地として知られ、物さびた風情の中に寺院や庵居跡等がある。さらに、大覚寺正面の参道には、造りのよい伝統的な門構えの緑豊かな和風住宅が、風趣ある町並みを形成する。



写真2-7-33 大沢池周辺の農村風景

伏見区の久我・羽束師地域は、古くから農村として拓けた地域であるが、淀川水系である桂川流域の氾濫に悩まされてきた。明治期以降、久世、久我、羽束師、淀地域で水利組合を設立し、悪水路の改善や樋門の修繕等を行ってきたが、戦後、桂川の堰は一ノ井堰と久我堰に統合されることになり、久我堰は昭和39年(1964)に完成した。

久我・羽束師地域では、京都の伝統野菜である畑^{はたけ}菜(かつては久我菜とも呼ばれる)が栽培される。京都の初午では、畑菜と油揚げのおぼんざいを食べると縁起が良いと言われる。

久我・羽東師地域は、近年では農地の間に住宅や工場が見られるようになってきているが、今もなお、久我堰から取水された用水の恵みを受けて農業が続けられており、古くからの寺社や農家住宅が農村景観を形成する。



写真2-7-34 久我・羽東師の農地
(提供：久我・食農ふれあいの杜体験農園)

このように、洛西用水流域では、古代から用水技術や治水工事が発達し、いまなお利用され続け、京の農業になくってはならない存在となっている。そして、流域の人々による清掃活動や豊作を祈願する祭礼が息づいている。

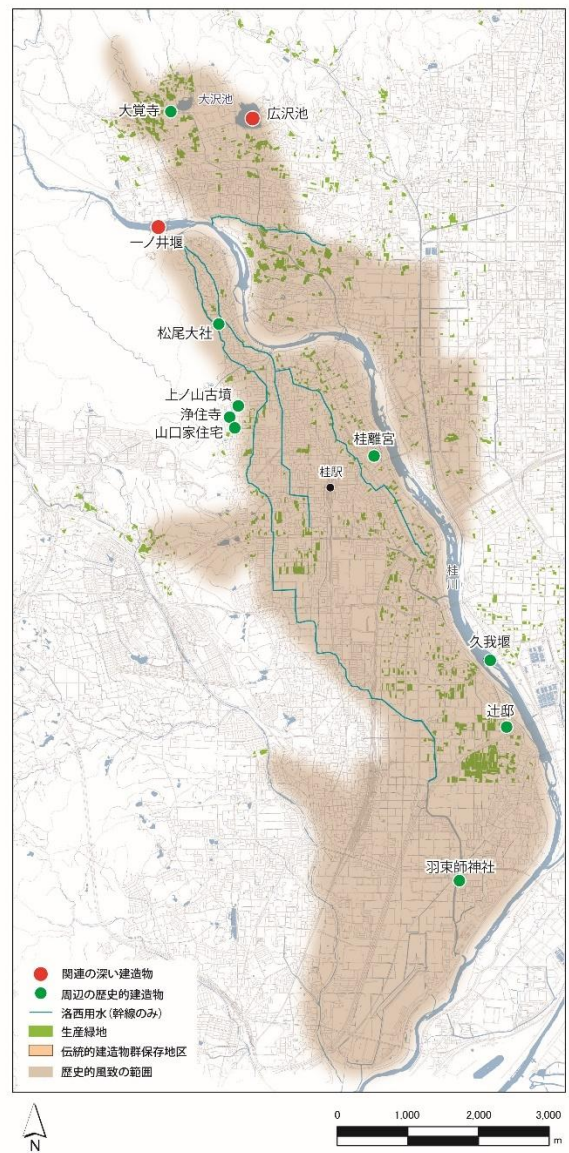


図2-7-12 京の農業を支える水辺(洛西用水)

b. 洛東の水の恵み

山科には明治時代に建設された琵琶湖疏水から引く用水路がある。山科疏水四ノ宮一燈園東側から取水して、山科東部丘陵地帯を流れる「音羽分水路」（現在の洛東用水）と、山科疏水日ノ岡付近で取水して、山科西部丘陵地帯を流れる「北花山分水路」（現在の東山用水）は、100年の歳月を超えて、現在も山科の田畑を潤す。

(a) 建造物

○洛東用水

洛東用水は、明治25年（1892）に着工された（音羽水路（現在の洛東用水）紀功碑より）。

当初は四ノ宮・音羽地域を流域としていたが、その後、東野・大塚・大宅や醍醐地域まで延長された。



写真2-7-35 琵琶湖疏水の洛東用水取水口

○東山用水

東山用水は、明治29年（1896）に造営された（花山分水路（現在の東山用水）記念碑より）。山科盆地を北から南に流れる山科川の西側地域の農地は、東山用水を主な取水源とする。



写真2-7-36 東山用水

(b) 活動及び市街地の環境

洛東用水流域では、昭和27年（1952）に京都市洛東土地改良区が設立され、山科区北東部から醍醐三宝院までの山科盆地東側の地域一帯が琵琶湖疏水の恩恵を受ける。管内の農地では、米を中心に野菜も多岐にわたり生産される。

東山用水流域では、昭和28年（1953）に京都市東山土地改良区が設立され、山科盆地の西側の北は三条通から南は山科区勸修寺までを東山用水を主な取水源とする。

それぞれの土地改良区では、水路の維持管理を行っている。洛東用水は通水期間が4月から10月までであり、通水前にはあちこちで水路を清掃する姿が見られる。

東山用水流域に位置する山科区花山稲荷神社では、収穫に感謝して11月に火焚祭が行われる。この火焚祭では、いつの頃からか、火勢の盛りにお供えのみかんを投げ入れるようになり、神火に触れたみかんを食べると年中風邪をひかないとも言われ、参拝者は競ってこれを拾いに行く。花山稲荷神社の火焚祭は「ふいご祭」ともいわれ、もともとは鍛冶師の祭りであった。「ふいご」は火力を強めるために用いる送風装置のことで、子狐丸と呼ばれる刀や鉄製農機具の製作に不可欠なものであった。花山稲荷神社では、古くから火焚串（護摩木）をふいごの形（先端が尖った形状）に積んで焚く。



写真2-7-37 花山稲荷神社火焚祭火焚串（提供：花山稲荷神社）

また、洛東用水流域の小山地区では、山の神（農業の神）と水神に感謝する祭礼である、小山の山の神（市登録無形民俗文化財）が毎年2月9日に行われる。蛇の形をした、藁で作った大きな綱をつくり、地区内を担いで回った後、「山の神の山の前」と称される場所の木に掛ける。

洛東用水や東山用水の流域である山科地域は、京都の旧市街地と同様に、三方を山に囲まれた盆地景観を形成する。現在は主に住宅地となっているが、旧街道沿いには古くからの集落や農村があったことから、今も歴史的な町並みが残る。

洛東用水流域は、山科盆地の東麓部にあたり、東側に行者ヶ森が切り立った山容を見せ、それを背景として山ろくに住宅地が形成される。また、東山用

水流域は、山地部の東山に連なる山々が山ろくの緑豊かな和風感漂う住宅地を形成する。

このように、洛東用水・東山用水流域では、明治時代に建設された琵琶湖疏水から引かれる用水が流域の田畑を潤し、農作物を育み、流域の人々による清掃活動や豊作に感謝する祭礼などの営みが息づいている。

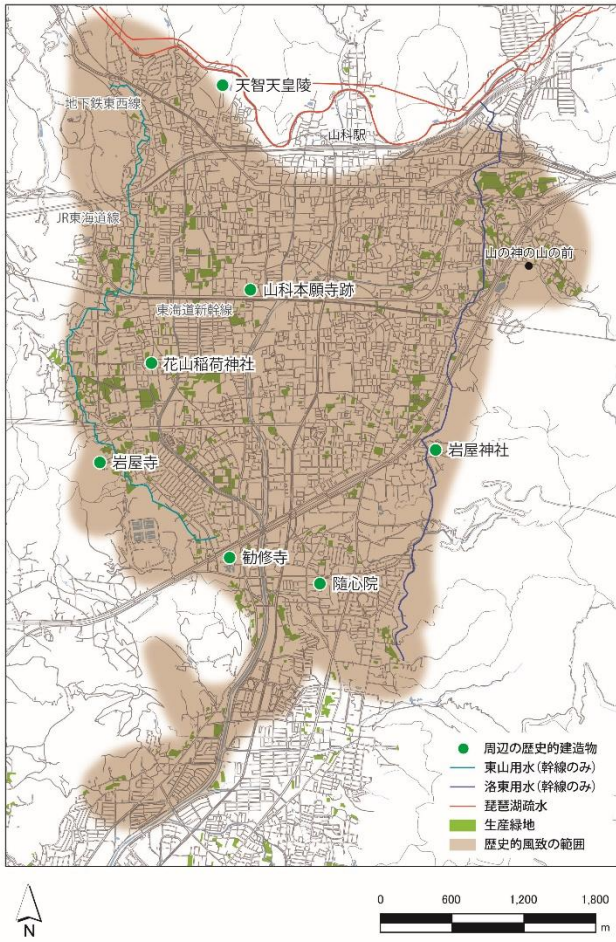


図2-7-13 京の農業を支える水辺（洛東用水、東山用水）

(オ) まとめ

京都では、水辺の信仰や祭礼、酒造りなどの生業、維持管理の活動等の多様な水にまつわる活動が受け継がれ、この舞台となる水辺空間と、背景となる周辺の山々といった自然景観、歴史的な町並みが一体となり、人々に潤いと豊かな恵みをもたらす。

京の水辺は、人々の暮らしや生業、身近なあらゆる場面に深く関わりながら、歴史的風致を形成している。

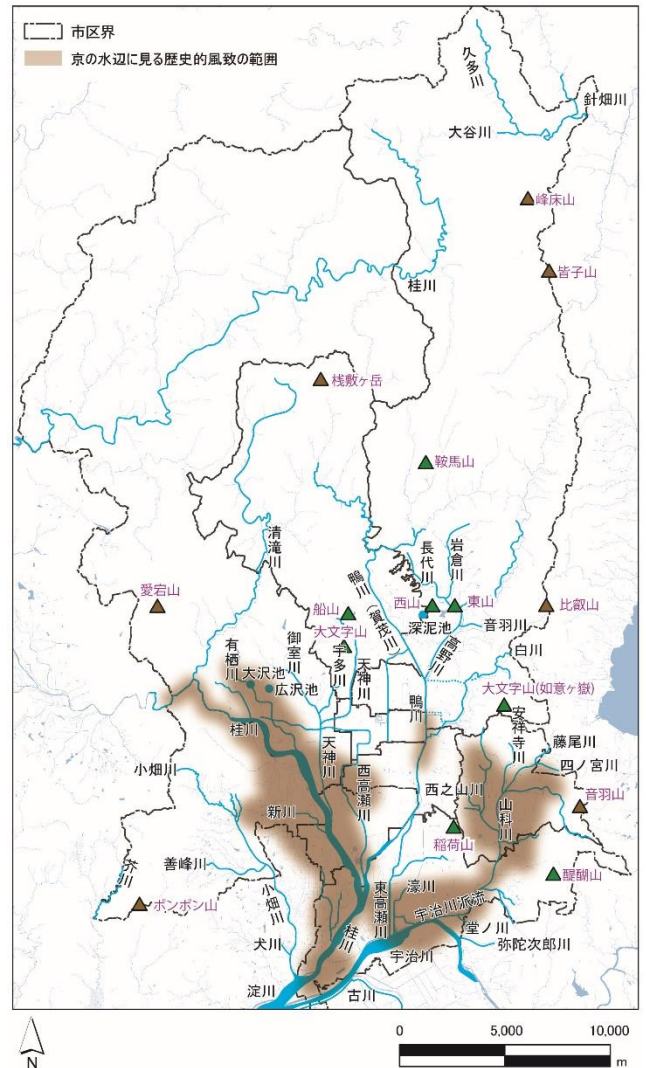


図2-7-14 京都の主な水系

(3) 山や野に見る歴史的風致

三方を山々に囲まれている京都は、これらの山々やその裾野、そして平野部などにおける営みと関わりながら、発展を遂げてきた。三方の山々に川筋のある特徴的な風土を有しており、この風土が生み出した盆地における農業の営み、山々における林業の営みが息づいている。中山間地域においては、山林、農地、民家群がセットになった美しい農山村集落の風景がみられるのも京都の特徴である。

ここでは、山や野が育んできた農業や林業により形成された京都の歴史的風致を示す。

(7) 生業の野：京野菜

a.京野菜の生産と加工

京都は海から遠く、海産物の運搬は難しい。このため、当時、世界でも有数の大都市であった平安京では、食生活を保つために野菜づくりが重要となり、洛外の地が野菜の生産地として開拓されてきた。また京都には、朝廷や寺院への献上品として、全国各地から優れた野菜の種や生産技術が集まり、品種改良も行われてきた。さらに、精進料理の発達なども手伝い、全国から集まったそれらの野菜が京都で育成され、根付いた。それに加え京都には、四季の移り変わりが明瞭であること、昼夜の温度差が大きいこと、地下水が豊富で豊かな土壌であったことなどの好条件がそろっており、このような環境が今日の京野菜を育てていった。

昨今、いつでも、どこでも画一化された野菜が出回っており、野菜の季節感がなくなっているなか、京野菜はその季節でしか味わえない野菜といえ、季節なくして京野菜を語ることは不可能である。

昭和62年(1987)に京都府が34種を「京の伝統野菜」として選定したのをはじめに、平成21年(2009)現在では、40種にまでその数を増やしている。

春は、朝掘りの京たけのこや花菜。夏には、賀茂なす、鹿ヶ谷かぼちゃなどの果菜類。秋には京みょうが。冬には九条ねぎ、京せり、千枚漬の原料となる聖護院かぶなど、その季節限定の野菜が登場する。また、京料理や京漬物においても季節の野菜で内容が変わり、旬が味わえる。京野菜は、京都の食文化を支え、京野菜を食することで、季節を愛で感じることができ、京都の人々にとって欠かせない存在である。京野菜の一つである九条ねぎや賀茂なすは、江戸中期発行の『ようしゅうふし 雍州府志』に記載が見られる。

表2-7-2 季節別「京の伝統野菜」一覧

季節	野菜	時期
春	花菜 (伝統野菜に準じるもの)	1月上旬～4月上旬
	佐波賀たいこん	2月～5月
	京たけのこ	3月下旬～5月上旬
	畑菜	3月下旬～5月上旬
	時無たいこん	4月
	京うど	5月
	桂うり	5月～6月
	伏見とうがらし	4月中旬～10月下旬
夏	万願寺とうがらし (伝統野菜に準じるもの)	5月中旬～10月上旬
	じゅんさい	5月～9月
	もぎなす	5月～7月
	賀茂なす	5月中旬～9月上旬
	山科なす	6月中旬～9月下旬
	鷹ヶ峰とうがらし (伝統野菜に準じるもの)	6月～9月
	田中とうがらし	6月上旬～10月下旬
	鹿ヶ谷かぼちゃ 柗野ささげ	7月上旬～8月中旬 7月上旬～9月中旬
秋・冬	京みょうが	9月
	聖護院たいこん	10月下旬～2月下旬
	聖護院かぶ	11月～2月
	すぐき菜	11月中旬
	えびいも	11月上旬～12月中旬
	京せり	10月下旬～4月上旬
	舞鶴かぶ	11月上旬～12月
	堀川ごぼう	11月上旬～12月中旬
	辛味だいこん	11月上旬～12月中旬
	青味だいこん	11月～1月下旬
	桃山だいこん	11月中旬～1月下旬
	松ヶ崎浮菜かぶ	11月下旬～2月下旬
くわい	12月	
茎大根	12月中旬	
大内かぶ	12月中旬～3月上旬	
鶯菜	1月～2月	
佐波賀かぶ	2月～3月	
その他	みず菜	通年
	壬生菜	通年
	九条ねぎ	通年
	聖護院きゅうり	保存
	郡大根 東寺かぶ	現存しないもの 現存しないもの
「京の伝統野菜」の定義 1. 明治以前の導入の歴史を有する。 2. 京都市域のみならず府内全域を対象とする。 3. たけのこを含む。 4. キノコ類、シダ類(ぜんまい、わらび他)を除く。 栽培又は保存されているもの及び現存しない品目を含む。		

(a) 建造物

○谷寛 (谷家住宅)

北区の谷家は、上賀茂の畑で収穫したすぐき菜を上賀茂地域の名産品である「すぐき漬」として加工、販売まで全て行うすぐき農家である。

主屋は、登記簿等によると昭和3年(1928)に建築された木造瓦葺2階建ての農家住宅であり、すぐき菜を漬ける「天びん場」や発酵させる「むろ」を備える。



写真2-7-38 谷寛 (谷家住宅)

(b) 活動及び市街地の環境

上賀茂周辺では賀茂なすや水稻のあとに、秋の終わりがち収穫されるすぐき菜の生産も行われている。

漬物のすぐき漬は、しば漬、千枚漬と並んで京都の三大漬物の1つといわれている。起源は定かではないが、江戸時代初期の『日次紀事』には記載があり、約300年前には既に漬物として評価を得ていたことが分かる。もとは社家町のみで栽培されていたもので、現在でも地域的に限られた状況で栽培され、栽培についての文献は無く地元住民の口伝にのみ伝えられている。収穫されたすぐき菜は漬物に加工される。

根の部分の皮を剥き、塩で予備漬け、本漬けたあとにむろに入れられ醗酵させる「むろ作業」を行う。これらの作業の加減などは長年の経験による秘伝となっており、すぐき菜の生産地が限定されている理由の一つとなっている。ただし、現在はこの地域だけでなく大原などにおいても、上賀茂の農家が出作してすぐき菜の生産が行われている。谷寛 (谷家住宅) は、今もこの地ですぐき菜を生産し、すぐき漬の加工・販売を行う。

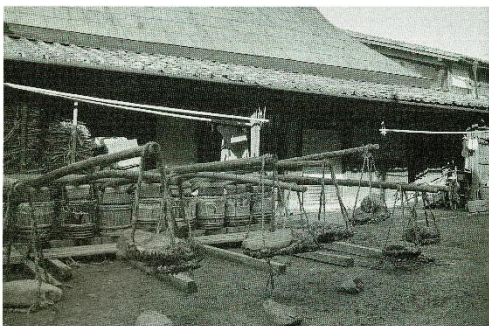


写真2-7-39 すぐきを漬ける (昭和30年代)

(出典: 『京都写真館 なつかしの昭和20年~40年代』 (平成22年淡文社) / 撮影: 浅野喜市)

「上賀茂伝統的建造物群保存地区」や「上賀茂郷界わい景観整備地区」に指定されるこの地域は、室町時代から上賀茂神社の神官が住む町として町並みが形成されたところであり、明治維新までの旧集落

は、上賀茂神社の神官 (社司と氏人) と農民が集住する特殊な性格を持つ集落 (社家町) であった。明治以後は京都の近郊農村的性格を徐々に強め、社家町の性格は薄らいでいったが、明神川沿いには今日も社家が旧来のまま連担し、他所で滅びた貴重な社家町が清々しく残っている。

明神川を中心とする水路は、上賀茂神社と結ばれる「神聖」なものであると同時に戦国期の動乱の中で、自衛施設として整備された「構」や「堀」のなごりであり、近世までは生活用水、現代では「すぐき」をはじめとするこの地区の農業生産用の用水路でもある。



写真2-7-40 明神川の流れ

このように、上賀茂周辺では、古くから農業生産が行われ、京野菜の生産、京漬物の加工・販売が行われている。こうした営みは京都の肥沃な大地と豊かな水の恩恵であり、上賀茂の社家町周辺の歴史的な町並みの中で行われる農業生産の営みは、市民の豊かな食文化を育む。

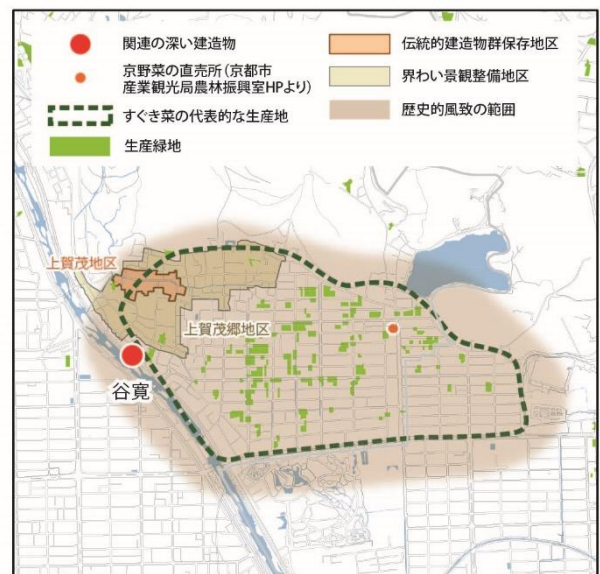


図2-7-15 京野菜の生産と加工

b. 西山の大地の恵み

西山連峰とその麓に拓けた丘陵地に位置する西山地域は、市内最大級の農業地域であり、たけのこの産地として知られる。また、大原野神社では、御田刈祭に伴う神事が継承される。

(a) 建造物

○うお嘉

西京区のうお嘉は、大原野にあるたけのこ料理を専門にふるまう料理屋で、明治5年(1872)に創業した。店舗に附属する蔵は、登記簿等によると明治5年(1872)の建築で、木造瓦葺き2階建てである。

創業当時、当地は交通の要所であったため、多くに旅人が休憩や宿泊に利用し、酒の肴にたけのこをふるまっていた。現在もたけのこ料理の専門店として営み続け、竹やぶの手入れやたけのこ掘りも店主自ら行う。



写真2-7-41 うお嘉 (提供：うお嘉)

○大原野神社本殿<市指定有形文化財>

西京区の大原野神社は、延暦3年(784)桓武天皇の長岡京遷都の際、藤原氏の氏神である奈良の春日大社の神々を大原野に祀ったのが始まりと伝わる。

本殿(市指定有形文化財)は、擬宝珠刻銘によると、文政5年(1822)とあることから、この頃再建されたとみられる。奈良の春日大社同様に一間社春日造の社殿が四棟並立する形式である。本殿前の中門・東西廊とともに、春日社系社殿の形態をよく伝える。



写真2-7-42 大原野神社

(b) 活動及び市街地の環境

春の京野菜を代表する京たけのこは、嵯峨天皇の時代(810~823)に長岡京市の海印寺寂照院の開祖である道雄が、中国から孟宗竹を持ち帰り、関西に広まったという説があるが、その当時食料として利用したかどうかは不明で、その後江戸時代に西山一帯に定着して栽培の対象となったという説が正しいと考えられている。明治時代に記された『京都府園芸要鑑』によると、現在栽培が盛んな西山地区には、寛政年間(1789~1800)に導入された。

西京区の大枝・塚原・大原野地域は、西山連峰とその麓に開けた丘陵地に位置し、京都の都市部に隣接する市内最大級の農業地域であり、たけのこの産地として知られる。

この地域では、高度な栽培技術と1年を通じての徹底した竹林管理がされている。秋から初冬にかけては竹藪に藁を敷き、肥料を施しては客土をかぶせてゆく。手間に手間を掛けた土はやわらかく、足が埋もれてしまうほどである。たけのこを掘る道具は、つるはしの刀の部分さらに長くしたような独特のもので、たけのこが土からまだ顔を見せない状態で掘り当てる。この地域は、山並みを背景にしたすそ野と田園が広がる集落で形成されており、伝統的な様式を残す農家をはじめとする町並みが形成されている。さらに、明治創業のうお嘉のように、たけのこ料理を専門にふるまう地域密着の料理屋も見られ、周囲の竹やぶとともに、一帯がたけのこの一大産地であることを感じさせる。

また、大原野地域は、平安時代には、紫式部の源氏物語、在原業平の和歌にも登場し、鷹狩や花の宴など貴族の行楽の地として親しまれてきた。大原野神社の神相撲(市登録無形民俗文化財)は、毎年9月第2日曜日の御田刈祭に伴う神事相撲である。江戸中期の享保年間(1716~1736)より行われている恒例行事で、氏子のうち、北春日町から選ばれた東の力士と、南春日町から選ばれた西の力士が、御田刈祭で授与されたまわしを着用して土俵に上がり、お神酒で四方の柱を清めた後、2度の勝負が行われ、一勝一敗で引き分ける。『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)に御田刈祭と奉納相撲の記載がある。



写真2-7-43 大原野神社の神相撲

大枝や大原野地域は、松尾に連なる山々の山ろくに竹林地帯の丘陵が広がり、たけのこを生産するために手入れされた美しい竹林が多く残る。すそ野の柿畑と一体となって、静かで落ち着いた佇まいの自然風景を形成する。

このように、京都は大都市でありながら近郊には田園風景が広がる。京野菜などの生産・販売が各地で行われ、販売所の周りでは地域の人々が新鮮な農産物を求めて集まり、交流の場にもなっている。京野菜の生産や販売などの営みは、伝統を守りながら今もなお受け継がれ、昔から変わらない人々の京野菜に対する姿勢を感じさせる。そして、周辺の農家住宅等の歴史的建造物、背後の山々の風景が、農業が行われている田畑を包み込んでおり、京野菜の歴史を感じさせる。

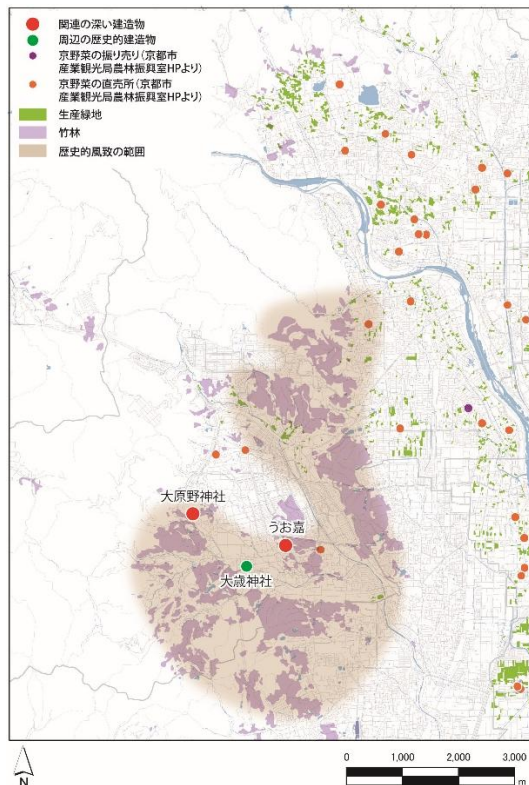


図2-7-16 西山の大地の恵み

(竹林出典：第6回・第7回自然環境保全基礎調査(環境省生物多様性センター))

(1) 五穀豊穡の祈り

市内では、秋になると五穀豊穡に感謝して多くの神社で火焚祭などの祭礼が営まれる。また、古代から農耕が盛んであった京都には、平安京以前から農耕神の産土神を祀る神社も多くあり、御霊が産土を巡幸する祭りが行われる。

a. 瑞饋祭

瑞饋祭は、菅原道真公が大宰府で彫られた木像を随行のものが持ち帰って祀り、秋の収穫時に野菜や穀物をお供えして感謝を捧げたことが始まりと伝わる。

(a) 建造物

○北野天満宮本殿<国宝> (再掲：P2-79 ものづくり・商い・もてなしのまち京都の歴史的風致)

○北野神社御旅所(北野天満宮御旅所)

中京区の北野神社御旅所は、北野天満宮の南、西ノ京御輿ヶ岡町にあり、境内の御輿岡神社は、北野天満宮の境外摂社である。瑞饋祭の期間中、神幸祭から還幸祭までの間、神輿が鎮座する。

御輿岡神社本殿の建築年代は定かではないが、境内の井戸に延享(1744~1747)の刻銘が見られる。



図2-7-44 北野天満宮御旅所

(b) 活動及び市街地の環境

○行列と瑞饋神輿

瑞饋祭は、慶長12年(1607)、北野天満宮本殿造営の際、西ノ京氏子の人々がこれを祝って新鮮な農作物で神輿を作り、神前に奉納したのが発祥と伝わる。『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)には、その歴史や行列の様子が記載される。

瑞饋祭は毎年、10月1日から5日の5日間にかけて営まれる。初日に当たる10月1日は神幸祭であり、北野天満宮本殿にて出御祭が行われる。神事が終わると、社殿から3基の鳳輦(鳳凰の飾りがある神輿)が降ろされ、飾り付けが行われる。行列は午後1時に北野天満宮の鳥居前から出発し、午後4時頃に御旅所に到着する。御旅所に着いた鳳輦は3基とも神

輿殿に納められるとともに、その前に台車から外された鉦頭が飾られ、鳳輦と鉦は3日間に渡って御旅所に駐輦される。

還幸祭は10月4日に営まれる。当日は午前10時から御旅所で出御祭が執り行われ、午後1時には行列が出発する。一方、ずいきをはじめとする農作物で飾り立てた西ノ京瑞饋神輿（市登録無形民俗文化財）は、行列に先立って御旅所を出発するが、行列とは異なる順路を辿り、北野天満宮の境内には入ることなく御旅所へ戻る。行列は御旅所から出発し、北野天満宮へ帰着する。その後、関係者だけによる着御祭が行われる。

祭りの道具の片付けは翌日の10月5日に行われる。片付けはおおよそ午前中で終了し、午後3時からえんさい やおとめ たまいの后宴祭と八乙女「田舞」奉納をもって祭りは終了となる。



写真2-7-45 瑞饋祭の瑞饋神輿

瑞饋祭は、明治8年（1875）に結成された梅風講社により運営される。梅風講社は、北野天満宮の崇敬者によって組織されており、それまでに存在した多数の講社が合併されて結成した。祭りの手伝いだけでなく、梅の実の摘み取り、紙屋川の清掃奉仕なども行う。瑞饋神輿は、西ノ京瑞饋神輿保存会によって供奉される。

瑞饋祭の行列や神輿が巡行する西ノ京地域は、昭和初期に西大路通が完成し、市電が開通してから、その沿道が急速に市街地化され、中小の工場の進出によりものづくりの拠点ともなっている。

北野神社御旅所周辺は、戸建ての住宅が立ち並ぶなかに京町家や小売りの商店が見られ、人の息づかいが感じられる歴史的な町並みを形成する。さらに、北野神社から程近い御輿保存会集会所周辺には、北野天満宮の摂社であり、菅原道真を最初にまつたと伝わる文子天満宮の御旅所や、同じく摂社の一之保社が集積し、歴史的な景観要素となるとともに、奥溪家住宅（市指定有形文化財）の茅葺屋根の長屋門が天神通の景観のアクセントとなり、歴史的な町並みを形成する。天神通は瑞饋神輿の巡行ルートでもあり、歴史的な町並みを背景に、神輿が通る場面は祭りの見どころ

の一つである。

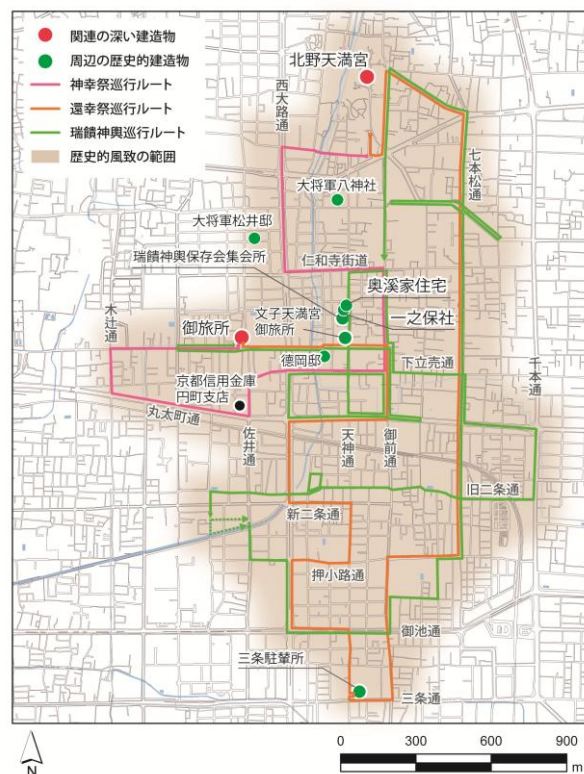


図2-7-17 瑞饋祭巡行ルート

b. 稻荷祭

伏見稻荷大社は、全国に約3万社あると言われる稲荷神社の総本社で、五穀をつかさどる稲荷神を祀る。

(a) 建造物

○伏見稻荷大社本殿<重要文化財>（再掲:P2-23 暮らしに息づくハレとケのまち京都の歴史的風致）

○伏見稻荷大社御旅所

かつて、伏見稻荷大社御旅所は、下社（七条油小路）、中社・上社（八条坊門猪熊）にそれぞれあったが、安土・桃山時代、天正年間（1573～1592）、豊臣秀吉により、2箇所の御旅所が廃され、現在地（南区西九条池之内町）に遷された。

稲荷祭の期間中には、奉安殿に5基の神輿が並ぶ。現在の奉安殿は昭和48年（1973）に建築されたものである（登記等による）。境内の奉納手水鉢には貞享元年（1684）の刻銘が見られる。



写真 2-7-46 伏見稲荷大社御旅所

○長谷川家住宅主屋<登録有形文化財>

南区の長谷川家は、九条地域で代々庄屋を務めていた。主屋（登録有形文化財）は、寛保2年（1742）に建築されたもので、棟札が残る。敷地中央に西面して建ち、切妻造棧瓦葺で、2階正面に横長の虫籠窓を設ける。

昭和初期に作成された「京都市明細図」など、京都の近世、近代の古文書等を数多く保管する。



写真 2-7-47 長谷川家住宅主屋（提供：長谷川家）

(b) 活動及び市街地の環境

稲荷祭の起源については諸説あり、平安時代の藤原資房すけふさの日記『春記』に最も古い記録が残る。

稲荷祭は、室町時代に山鉾も登場し、祇園祭に匹敵する盛大な祭りだったという。応仁・文明の乱（1467～1477）により中断、山鉾も消滅した。戦乱後、文明8年（1476）に神幸祭が再開される。江戸時代、延享元年（1744）、神幸列に産土の人々が奉仕した。江戸時代には、「京の三大祭（ほかに葵祭、祇園祭）」の一つになった。

長谷川家住宅が所蔵する長谷川軍記（文政5年（1822）～明治4年（1871））の日記にも、嘉永元年（1848）の稲荷祭の神輿還幸の様子が記載されるとともに、『日本歳事史（京都の部）』（大正11年（1922）発行）にも、稲荷祭還幸祭の様子が描かれる。

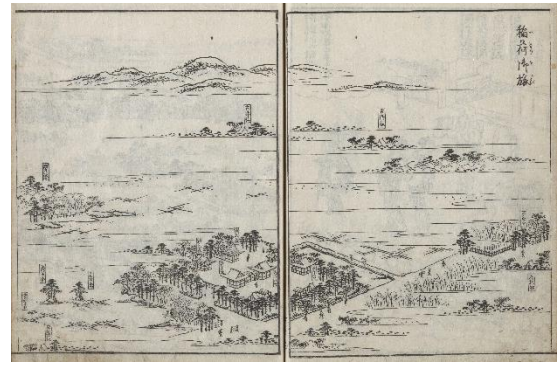


図2-7-18 稲荷御旅（稲荷御旅所）

（出典：『都名所図会』（安永9年（1780））

稲荷祭は、神幸祭、還幸祭、後宮祭からなり、稲荷大神が御旅所に渡御し、還幸する。

神幸祭は4月20日前後の日曜日に行われる。5基の神輿しんじが遷され、神輿は伏見稲荷大社を出て竹田街道を北上し、七条通を西行、大宮通を南行して、御旅所に着き駐輿する。

5基の神輿は、上社（東九条）、下社（塩小路・中堂寺）、中社（西九条）、田中社（不動堂）、四大神（東寺・八条）であり、氏子祭（神幸祭より1週間後の日曜日）では、「五ヶ郷」と呼ばれる氏子域が奉仕し、それぞれの氏子域を神輿が巡行する。

上社の神輿は、東九条地域（陶化学区、東和学区、山王学区）が担当する。神輿は5基の中でも一番重いと言われ、毎年巡行ルートを変えて氏子域をくまなく練り歩き、主要交差点では神輿回しや差し上げが披露される。



写真 2-7-48 稲荷祭

還幸祭（5月3日）では、神輿は御旅所を出発し、御旅所前の油小路通を南行、十条油小路を西行する。大宮九条で北上し、五条通、松原通、東山地域を巡り、竹田街道を南行し、伏見稲荷大社に至る。

今では神幸祭、還幸祭ともにトラックによる巡行となっているが、氏子域では今も神輿担ぎが行われており、担ぎ手の掛け声や多くの見物人で周辺は賑わう。この期間、伏見稲荷大社御旅所では、中堂寺

六齋会による六齋念仏や氏子衆による神賑^{かみにぎわい}が奉納される。

稻荷祭の氏子域は、非常に広範囲に及び、各所様々な町並みを形成する。東九条地域の中心を南北に貫く竹田街道は、古くは都と伏見をつなぐ歴史的な街道で、今も神輿担ぎが行われる巡行ルートにあたる。街道の周辺には、長谷川家住宅をはじめ規模の大きな農家住宅がまとまって残り、かつては近郊で藍や九条ネギが盛んに栽培されていたことを偲ばせる。さらに、宇賀神社や新宮神社等の境内の緑が町並みに歴史的な趣をもたらす。

西九条、東寺、八条地域は、広大な東寺の寺域を取り囲む築地塀越しに木造建築の堂宇や五重塔の姿を望むことができ、東寺の門前町の風情を有する。

中堂寺地域は、中央卸売市場などの大型公益施設を有するとともに、活気溢れる下町の風情を醸し出す。かつて花街であった島原が程近く、通りに面して豪壮な格子を構える角屋（重要文化財）や輪違屋及び島原大門が残り、日本のもてなし文化の粋が残される。

このほか、巡行ルートの北端では職住共存の町並み、東端では東山を背景に寺社が立つ歴史的な町並みなど、様々に個性のある町並みを背景に、稻荷祭が行われる。

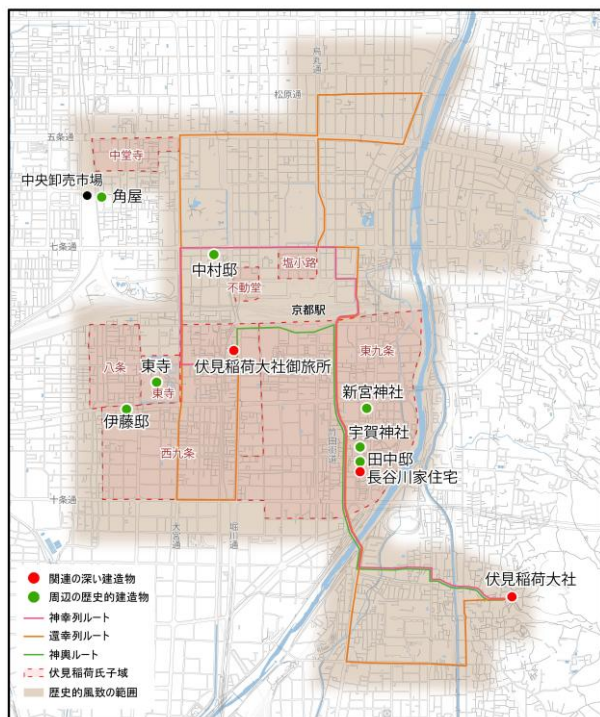


図2-7-19 稻荷祭氏子域及び巡行ルート

(7) 生業の山

a.北山の林業

北山地域は古来より磨丸太生産を特徴とする林業が盛んであり、現在もその生業が受け継がれている。

(a) 建造物

○森久商店倉庫

北区の森久商店倉庫は、北山杉を磨き加工し、自然乾燥させ、販売まで保管する倉庫である。木造2階建てトタン葺きで、棟木の墨書から昭和5年(1930)建築と分かる。周りの木造倉庫群と調和して美しい景観を作っており、磨き丸太生産の全盛時代を彷彿とさせる。



写真2-7-49 森久商店倉庫

(b) 活動及び市街地の環境

京都北山地域は、京都市街地の北西部に広がり、「北山杉」として全国に知られた磨丸太生産を特徴とする日本でも有数の林業地帯である。谷沿いの斜面はいずれも急峻^{きゆうしゆん}で、水田や畑地として利用できる谷底の平地がほとんど無かったことから、集約的な林業が営まれてきた。1年を通して気温が低く、ほどよく湿り気の多い空気が、北山杉を育てるのにこのうえない条件を作り出している。

なかでも中川・杉坂・真弓・大森といった集落周辺では、北山杉の生産が盛んに行われた。



写真2-7-50 北山杉

北山杉の林業地域は、京都の「近郊山村」というべき位置に立地し、古くから京都の経済と密接に結

びつくり形で生業が営まれてきた。北山杉の歴史は古く、約600年も前の応永年間（1394～1427）まで遡る。近世以降、これらの地域は茶室建築や数寄屋建築の需要の高まりとあわせて、床柱や垂木などの建築用木材の供給地となった。天明7年（1787）に発行された『拾遺都名所図会』には、北山の樵きこりが奥山より長材を運び出す様子が描かれる。

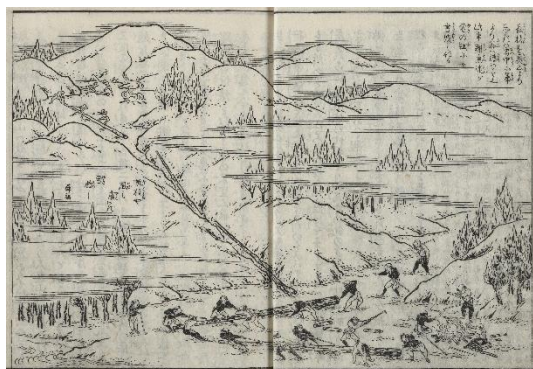


図2-7-20 北山の樵

（出典：『拾遺都名所図会』（天明7年（1787））

北山杉の木材は、磨き丸太という、樹皮をはぎとった丸太を砂できれいに磨きあげた無垢の状態で見られることに特徴がある。加工によって形状を修正することができないため、育林時に一本一本の杉木を用途に応じてまっすぐに、太すぎず、細すぎず、そして美しく節のないよう慎重に育てる必要がある。このような手間暇をかける生業が代々に渡って受け継がれ、そして今も行われているのである。



写真2-7-51 北山杉の磨き

（提供：京都北山丸太生産協同組合）

この辺りでは、北山杉の斜面地に囲まれた狭隘な地に集落が形成されている。このため、作業場を敷地内の前庭などに取りが必要があり、広い前庭と対照的に屋内の土間は非常に狭い。このような、独特の配置と内部構造を持つ民家などの歴史的建造物が伝統的集落の佇まいを今に伝えている。

また、川に沿って長く建ち並ぶ森久商店倉庫などの乾燥小屋の眺めは壮観である。多くは木造2階建てであるが、建物全体を包み込む大きな屋根の連な

りは見ごたえがある。北山杉丸太の乾燥小屋は、全国的にも類例を見ず、その存在はきわめて珍しい。



写真2-7-52 乾燥小屋の眺め

このように、現在も続けられている林業によって形成された、まっすぐ上に伸びる北山杉の美しい人工林風景が、磨き丸太の乾燥小屋などの生業に関わる施設や民家とともにこの地域の集落特有の町並みを形成しており、京都の伝統産業の技が今もなお、綿々と受け継がれていることを感じさせている。



図2-7-21 北山の林業

b. 洛北山間地の松上げ

全国的に分布する柱松行事の一形態とされる松上げは、洛北山間地で、愛宕山への献火行事として、火除け、五穀豊穡を祈願して行われ、夏の伝統行事として幻想的な空間を形成する。

(a) 建造物

○志古淵神社本殿<市指定有形文化財>

左京区久多の志古淵神社は、安曇川あづみ川がわに分布をみる志古淵神を祭神としており、久多の花笠踊（重要無形民俗文化財）が奉納される。

本殿（市指定有形文化財）は、寛文12年（1672）

に建築され、杉皮葺の三間社流造である。^{かえるまた}臺股などの様式に古い形態を残し、境内は京都市文化財環境保全地区に指定される。



写真2-7-53 志古淵神社

(b) 活動及び市街地の環境

○洛北山間地の松上げ

京都北部から若狭にかけて広がる山里では、8月下旬に松上げとよばれる火祭が行なわれる。松上げは一般に「柱松」と呼ばれるもので、修験道の行事と深い関わりをもつ行事である。市域では、左京区の花脊八桝^{はなせやます}（花脊松上げ）、広河原（広河原松上げ）、久多宮の町（久多宮の町松上げ）の集落で松上げが行われており、いずれも市登録無形民俗文化財となっているほか、右京区の小塩（小塩の上げ松：府登録無形民俗文化財）、雲ヶ畑（雲ヶ畑松上げ：市登録無形民俗文化財）でも松上げが行われる。

久多宮の町松上げの始期は定かではないが、戦前から書き継がれる宮の町の勘定帳では、昭和34年（1959）に松上げで使用する神酒代が計上されていることが分かる。

松上げが行われる当日は、先端にモジとよばれる籠を取り付けた灯籠木という高さ20mの檜の柱が垂直に立てられ、夕刻には、周囲に多くの地松（地面に差して灯す松明）が立てられて、幻想的な雰囲気となる。村の男たちが灯籠木場に到着すると、一斉に地松に火が灯され、先端のモジを目指して手松明を投げ始める。そして点火後、灯籠木を倒す。

北区雲ヶ畑で行われる雲ヶ畑松上げ（市登録無形民俗文化財）は、他の柱松行事とは異なった内容・形態で、山上で、100束余の真割木の松明を3m四方の格子状の枠にくくりつけ、夜になって松明に点火すると、櫓状に立てて山ろくから見えるようにする。

右京区京北の小塩^{おじお}でも小塩の上げ松（府登録無形民俗文化財）が行われる。焚松を高さ15mの灯炉木のモジめがけて投げ上げる妙技を競う。



写真2-7-54 久多宮の町松上げ

愛宕信仰に結び付いた「松上げ」は洛北の山間地に伝わる行事である。防火と豊作の祈り、そしてお盆で迎えた先祖の霊をあの世へ送る。様々な思いが込められた民俗行事が洛北山間部の夏の終わりを感ぜさせる。



写真2-7-55 久多の茅葺民家（提供：久多里山協会）

これらの山間部の地域は、林業や農業、かつては炭焼きが行われ、茅葺き民家が多く残り、豊かな自然を背景にした農村景観が広がる。

久多地域は、市の最北端に位置する集落で、その歴史は古く、南北朝時代の貞治4年（1365）、隣村の朽木荘民が立ち入ることを禁じた幕府禁制札が残る。久多の花笠踊（重要無形民俗文化財）は、この地域の5つの集落で、互いに競い合うように伝承され、演じられてきた風流踊で、花笠と呼ばれる美しい造花で飾った灯籠を手に持ち、太鼓に合わせて歌い踊る。花笠踊の当日は、花宿と呼ばれる家から踊りを披露しながら集落を移動し、志古淵神社に向かう。

志古淵神社周辺は、久多川沿いに茅葺き民家が残る、北山友禅菊畑や水田が広がる。

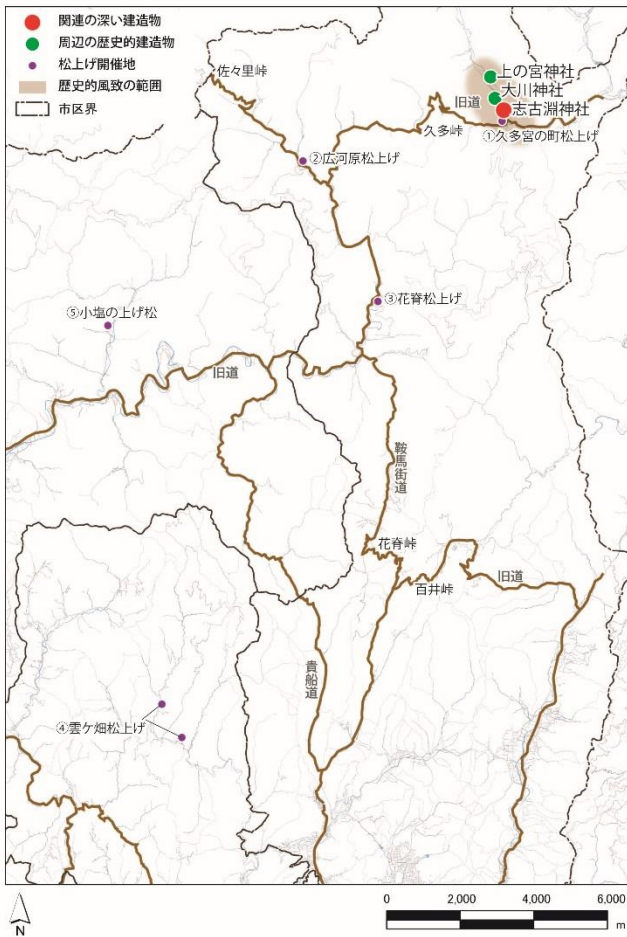


図2-7-22 松上げ開催地域

(I) まとめ

京都は、肥沃な土壌や豊富な山林の資源に恵まれてきた。その環境のもと育まれた京野菜は、現代に続く伝統野菜となり、京漬物などを生み出し、日ごろから食卓で親しまれる。また、北山林業においても、現在に至るまで、その生産とともに美しい北山杉の山並み、林業の建造物が受け継がれてきた。

市内では、こうした山や野の恵みに感謝するため、多くの神社で祭礼が営まれるほか、山間部では松上げが営まれる。

このように、京都の農業や林業の生業と、生業を営むための水路や周辺の農家住宅などとともに、五穀豊穰を祈る祭りとその拠点となる寺社が歴史的な町並みの要素となり、歴史的風致を形成している。

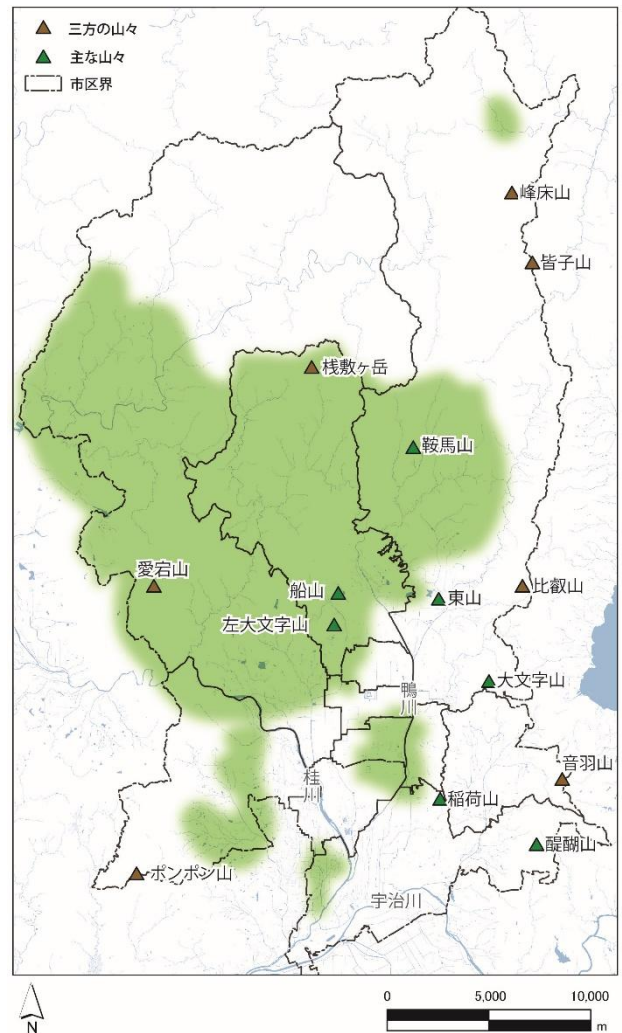


図2-7-23 京都の山

(4) おわりに

京都は、豊富な水や緑、肥沃な土壌などの自然環境に恵まれ、それらが酒造や農業、林業などの多様な生業を育んできた。また、それらの水辺を大切に思う思いが水に関連する祭礼や維持管理活動を生み出してきたほか、山や野の恵みに感謝し、五穀豊穰に感謝する祭りが継承されてきた。

京都では、水辺や農地、森林が暮らしや生業の場として、大地の恵みに感謝する祭りとともに地域住民の身近な存在となり、大切に守られ、豊かな自然環境と様々な活動が息づき、京を育む水・土・緑の歴史的風致を形成している。

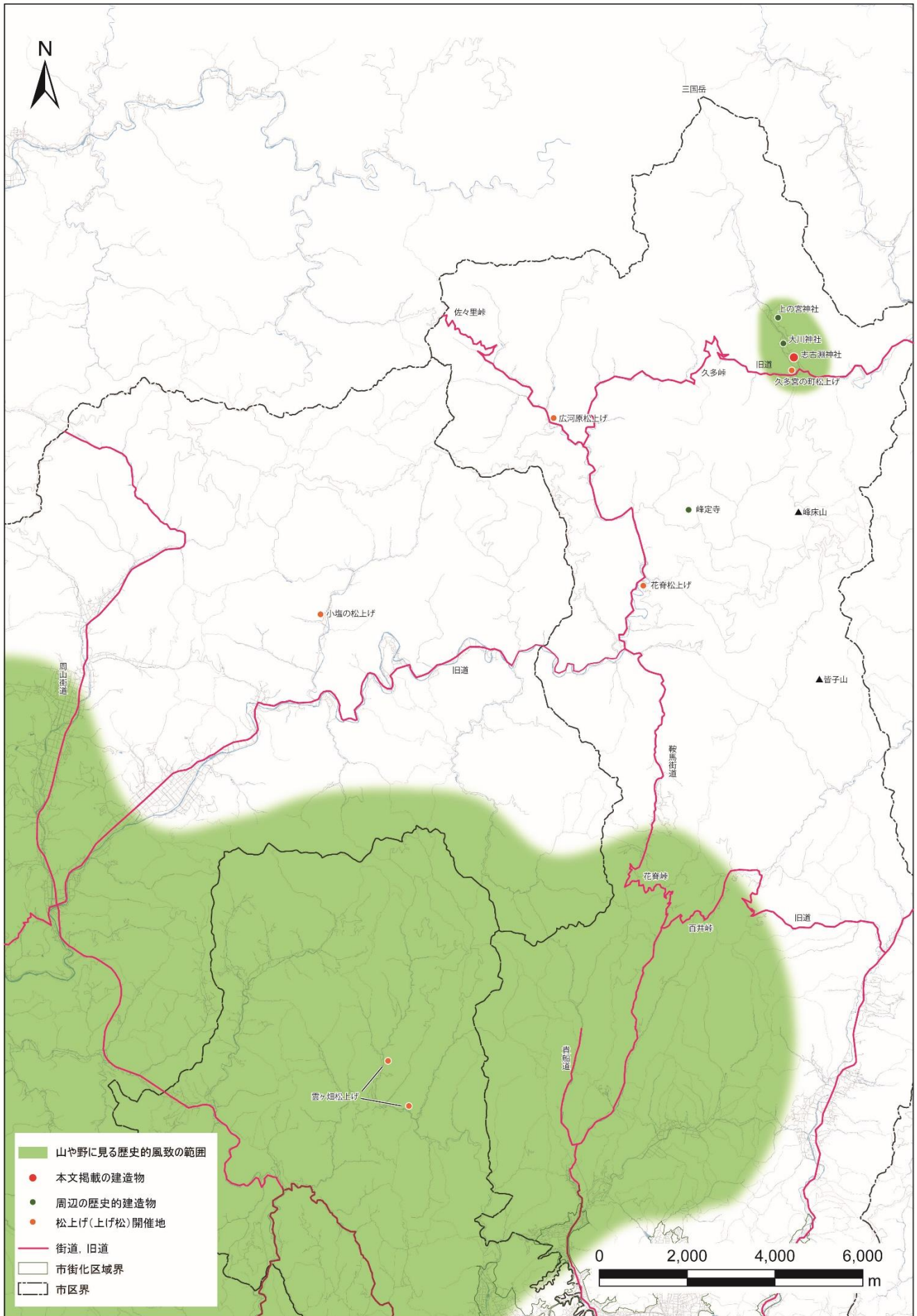


図2-7-24 千年の都を育む水・土・緑に見る歴史的風致（北部）（総括図）

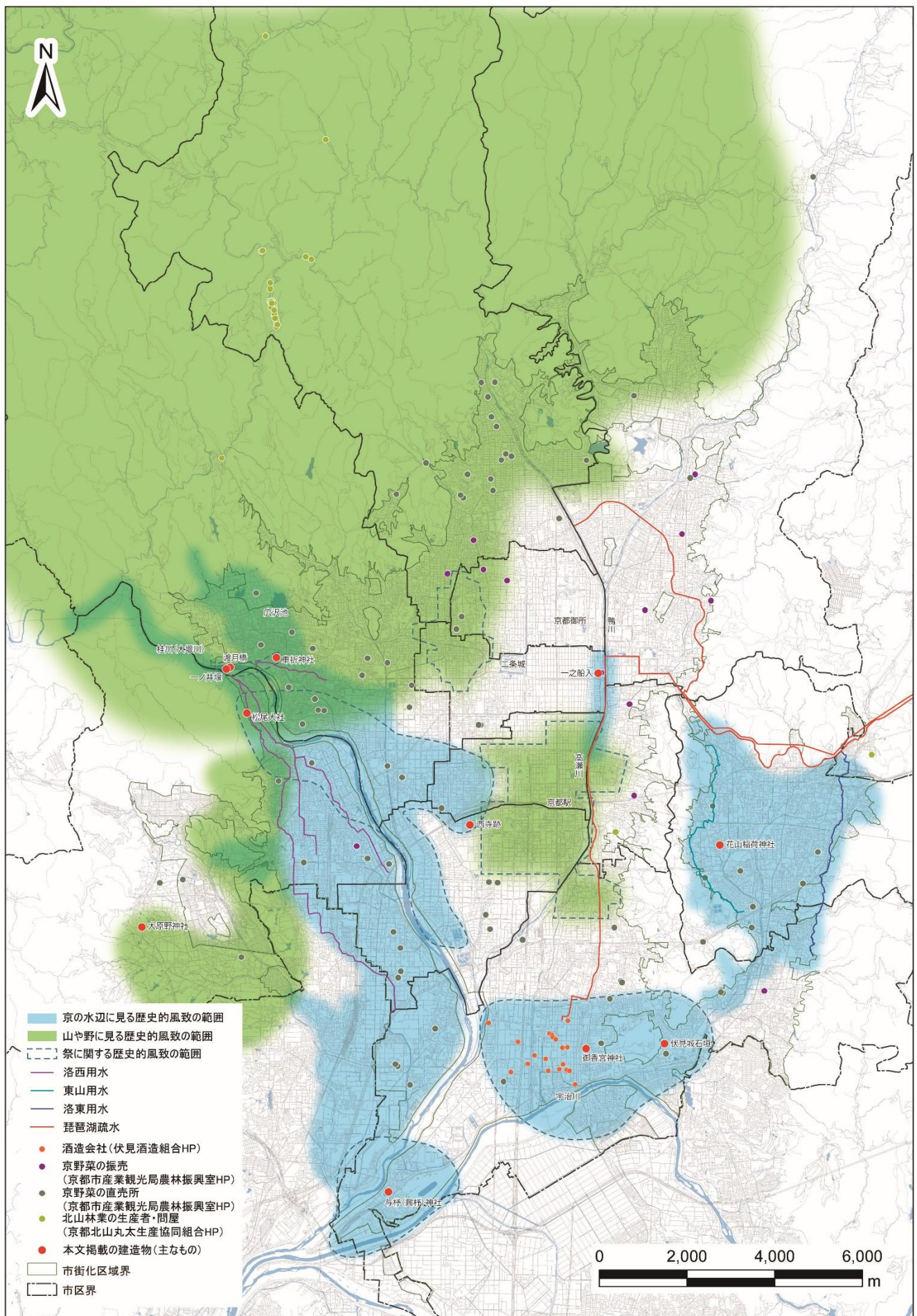


図2-7-25 千年の都を育む水・土・線に見る歴史的風致(南部) (総括図)